求道

第八卷
第貳號

求道第八卷第貳號目次

求道

◎親鸞聖人の眞實相　近角常觀

序言

一　拯濟無邊極濁惡

二　法然聖人と親鸞聖人

三　聖德太子と親鸞聖人

四　『敎行信證』

五　『西方指南鈔』及『聖德皇太子奉讃』

講話

◎醍醐の妙味　近角常觀

雜錄

◎親鸞聖人の傳道　近角常觀

◎親鸞聖人の『入出二門偈』　近角常觀

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時
第一求道會
（九段坂佛敎倶樂部）

毎月二日午後七時
第三求道會
（日本橋蠣殼町說敎所）

求道　第八卷第貳號

親鸞聖人の眞實相

序言

噫我等何の幸か親鸞聖人の六百五十年忌に遇ひたてまつることを得た。實に遇ひ難き眞宗に遇ひたてまつり、獲がたき信樂を獲得したてまつり、而して玆に知恩報德の大御遠忌に値遇したてまつるといふことは、實に一生涯に於て再びなき宿緣と慶ばねばならぬ。しかるに平素聖人の德を鑽仰し、慈光界中に感謝しつゝあるが爲に、門末は勿論門外の人と雖も世を擧て遺德を追慕する時に當りて却て特更に言ふべき點を見出し得ない感がある。されど亦退て聖人の眞實相を仰望せんとすれば、不可稱不可說不可思議にして殆んど一語を發するあたはざる感がある。かくて止むべきにあらざれば今日に至るまて聖人の恩德によりて頂戴したる信仰を以て聖人の眞實相を慶嘆したてまつらうと思ふ。

一、拯濟無邊極濁惡

親鸞聖人の眞實相といふ事について、讃仰して見度い。眞實相といふ言葉は、充分適當なる言葉では無いが、其の意味は之を世間的に言へば、聖人の全人格を通じて、聖人の聖人たる眞精神とでも申す可き事である。之を信仰的に言ひ換へれば、聖人滿九十年の間御胸中に常に蓄へ給ひし御信仰の眞髓は何であるかといふ事である。勿論如何なる言葉を以てゞも、言ひ表はし得るであらう。されど私は『拯濟無邊極濁惡』といふ一句を以て、聖人の眞面目を仰ぎ奉る事が出來ると思ふ。抑々『敎行信證』は、聖人の御自督である。其の中に於て『正信偈』は其の御自督中の骨目の告白せられたものである。而して『拯濟無邊極濁惡』の一句は最後の總結にして、聖人の全信仰を盡されたるものである。全體眞宗と言へる言葉は聖人の開闢し給ひし宗旨の名となりたれども、聖人御自身に於ては是れ法然聖人の敎えにして、泝りては、三國の祖師の敎の儘である。さればこそ『正信偈』法然聖人の下に「眞宗敎證興片州、選擇本願弘惡世」と言ひ、又『化身土卷』には「四依弘經大士、三朝淨土宗師、開二眞宗念佛一、導二濁世邪偽一。」とあ

る。即ち平太郎に對する御教化にもある如く、「三國の祖師おの〳〵この一宗を興行す、この故に愚禿すゝむるところ更に私なし」といふが、聖人の御精神である。其の「弘經大士宗師等」の敎へ給ふ眞宗の骨目は『拯濟無邊極濁惡』の大德音である。愚禿釋親鸞慶ばしい哉、遇ひ難くして今遇ふことを得、聞きがたくして今聞くことを得たり、是の眞宗の敎行證を敬信したる自督のありなりが、實に『拯濟無邊極濁惡』である、是れ三朝七祖の敎の儘である、愚禿一點の私を加へたものでは無い、彌陀の本願の儘である、法然聖人の仰のまゝである、「道俗時衆共に同心に、唯斯の高僧の說を信す可し」と仰せられたのである。斯の如く頂き來れば、『拯濟無邊極濁惡』の大德音は、聖人の胸中に宿り給へる彌陀の本願、三國の祖師の開き給ひし眞宗其のものである。言ひ換へれば、聖人一點の私を雜へざる全信仰の眞實相である。

斯く『拯濟無邊極濁惡』の一句に聖人の眞實相を見出したといふ事は、決して聖敎文句の上より推論したのでは無い。聖人の御敎化を頂かせて貰うた有りの儘である。即ち聖人の御敎化は外では無い。我こそは實に無邊の極濁惡である、此無邊極濁惡の愚禿親鸞を拯濟し給ふが法藏因位の本願、五劫思惟の御苦勞である。故に『歎異鈔』にも、『聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そこばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懷さふらひしことを」とある。實に此の「親鸞一人がためなりけり、されば、そこばくの業をもちけるを」の一語が、『拯濟無邊極濁惡』の眞の味である。聖人は彌陀の本願を以て人の爲めとは思し召さぬ。そこばくの業をもちける親鸞一人がためなりけりと、且つは懺悔し、且つは感謝し給ひたのである。此の親鸞が曠劫以來罪惡生死に苦しみつゝあるが爲めに、五劫永劫の御苦勞をかけたのである。此の五劫永劫の御苦勞も、此の罪業深重の親鸞一人をお目當である。親鸞なかりせばいかで如來に斯くの如き御苦勞をかけ申す可き、如來なかりせば、親鸞いかで斯くの如き救ひを蒙る可き、實に是れ聖人御自督の生粹である、善導二種深心の儘である。されば こそ『歎異鈔』の次の文に、『いまた案ずるに善導の自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみ、つねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言にすこしもたがはせおはしまさず」とある。『愚禿鈔』は

聖人の晩年に於ける告白である。而して其の下卷は聖人のお傾解である。其の處に善導の釋文を擧げて、二種の深心を以て聖人の胸中を披瀝せられたも、全く之と同樣の思召である。斯くの如く頂き來れば、更に何の新奇なる事も無さやうなれども、夫れは聖人の御敎が普及したる今日の結果に於て言ふ事で、若し聖人の御敎化無かりせば、いかで我等罪惡を自覺し、絕對の救濟を仰ぐ可き。若し世間的の言葉を以て言ひ表はせば、『拯濟無邊極濁惡』といふことは、罪惡の自覺と、及び之に對する絕對の救濟である。抑々此の罪惡の自覺、即ち我こそは無邊極濁惡の凡愚底下なりといふ自覺を起す事がなか〳〵出來ぬのである。而して自から此の罪惡自覺をなして下されたのが、實に親鸞聖人の眞實相である。

二、法然聖人と親鸞聖人

是に於て法然聖人の御敎化と、親鸞聖人の御自督の關係を知らねばならぬ。抑々法然聖人の御敎化は、選擇本願念佛といふことを以て盡されて居る。而して其の主旨は、貧窮困乏の類、愚鈍下智の者、少聞小見の輩、破戒無戒の人を救濟し、一切を攝せんが爲めに、彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催うされ、造像起塔、智慧廣才、多聞多見、持戒持律等の諸行を擇び捨てゝ往生の本願の爲さず、唯稱名念佛の一行を選び取つて其の本願の爲すなりといふが、『選擇集』の精神である。苟も此の書を讀み、面の當り此の御敎化を蒙る者、之か了解出來ぬ筈は無い。しかるに其意味は之を了解するも、自分自身は其の所謂貧窮困乏乃至破戒無戒の者であるといふ自覺を生ずることが甚だ難い。法然聖人の門侶三百八十餘人、何れも之を自分自身の上に頂いた人が少い。是等の人々の心中に以爲く、如何にも彌陀の本願は罪業深重の者でも助くる大悲である、斯く言へばとて殊更に罪業深重にならねばならぬといふことは無い、勿論法然聖人の仰せの如く、設へ惡人でも救ひ給ふなる可けれども、出來得る限りは善を勵まざる可らず、行を勵まざる可らず、戒を持たざる可らず、觀念をも爲さざる可らずといふように考へて、法然聖人が『選擇集』一部に於て血涙を揮つて、捨閉閣抛の廢立を主張し、設ひ源空を死罪に處すとも言はざる可らずと宣へる專修念佛の眞敎を全く反古にしたる結果に陷つたのである。

一往道德上の見地より言へば、設ひ惡人でも救ひ給ふなる可けれど、出來得る限り善を勵まざる可からずといふことは、

頗るに穩當して且つ健在なる思想なる可けれど、信仰的見地より見れば、頗る傲慢自惚れの態度と言はねばならぬ。若し出來得る限り善を勵まざる可からず、行を勵まざる可からず、觀念をも爲さゞる可からずと言ひて、之が出來得るものならば、佛何が故に造像起塔乃至持戒持律等の行を擇び捨て給へる。如來既に選擇本願を建て給ひし昔に於て、豫ねて知し召して煩惱具足の凡夫、罪業深重の衆生と呼びかけ給ふにあらずや。然るに此の選擇本願に遇ひながら、恰も與り知らざるが如く、之を他人の事の如く思ひ做し、設ひ惡人にても助け給ふなる可けれども、出來得る限り善を勵まんと言へるは、傲慢自惚れと言はずして何んぞや。獨り親鸞聖人に至りては、其の貧窮困乏の類といふは、我が身のことなり、愚鈍下智の者とは我が身のことなり、少聞少見の輩といふは我が身のことなり、破戒無戒の人といふは我が身のことなり、我が身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに沈み、つねに流轉して出離の緣あることなしと深信せられたのである。『歎異鈔』に於て、「そのゆゑは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、何れの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とあるは、正に此の選擇本願の思召を自分の身の上に頂いて、我が身の程を知られたる眞の落ち心地である。

譬へば茲に名醫ありて、一妙藥を發明したりとせんか。此の妙藥たる尋常普通のものにあらず、如何なる醫師と雖も治す可からず、如何なる藥を以ても療す可からざる難治難癒の痼疾に向つて、特効全治の妙藥である。今此の名醫より手づから、此の妙藥を與へられたる時、若し病人にして、我は未だ難治難癒の病人にあらず、猶ほ他の醫師によりて療せらるべく、他の藥によつて治せらる可しと思はゞ、何ぞ深く此の妙藥を信じ且つ用う可き。之は妙藥なり、諸人助けなりと考へなば、折角の妙藥も其の人自身の爲めには何等の効もないことになる。然るに病人にして此の名醫の手づから與へたる妙藥の價値を言ひ知らされた時は、同時に必ず我が難治難癒の痼疾者たる事を自覺して、斯る全治の見込み無き者を助けんと言へる名醫の親切に向つて、絶對の信頼をするの外は無い。既に我は難治難癒の痼疾者なりと知らば此の妙藥は一般の病人の爲めては無く、諸人助けではない、實に我一人の爲めである。而して其の妙藥の果して特効あるや否や、又其の成分の有害なりや否やを詮索するの要は無い。我が如き痼疾を全治せんとの唯一の妙藥なり、我も用ゐつゝあり、汝も之を用うべしと聞かば、之を信ぜずには居られぬのである。是實に『歎異鈔』に「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人のおほせをかふむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもつて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされ參らせて地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」と本願醍醐の妙藥を頂きて、我こそは難化の三機、難治の三病なりと告白せられた所以である。

併し此の如く難治の痼疾を治する妙藥ありと言はゞ藥あり毒を好みてもよい、かく惡しきものでも助かるものならばまだ〳〵罪惡を犯してもよいといふことを敎ゆることにならぬかと懸念するものがあるであろう。此の如きは聖人も誡めたまひし如く、邪見に陷りたるものにして、未た眞に罪惡を自覺せざる横着心より起るのである。何んとなれば、極濁惡を救はるゝゆへに、猶惡いことを爲ても可いといふは、自分はまだ極濁惡になりて居らぬといふことである。極濁惡まではまだ餘地がある考である。餘程自分は高き處に居るつもりなのである。發現の趣は大に異りて居るなれども、惡しきものでも助けて下さるが成るべく善を勵むべしといふのと全く同樣の傲慢の立場である。要するに何れも自分を中位に考へて居るのである。よりて道德的に考ふればなるべく善を勵むべしといひ、邪見に陷れば猶惡くてもよいといふ樣になる。しかるに眞實の信仰を頂くときは我こそは極濁惡である、是より已上に惡くなり樣がないのである、底下の凡愚である、下の下である、地獄は一定すみかである、毒を好む餘地がない、既に毒を以て滿たされて居るのである。可成立つがよいとか坐つてもよいとかいふのは猶中腰で居るからである。極重惡人無他方便の我等は既に墮獄の極、倒れて仕舞て居るのである、此上に倒れやうがない。此最惡最下の衆生の爲めに極善最上の法を說かれたのが選擇本願醍醐の妙藥である。

猶ほ多少信仰に對して側面觀に陷る處あれども、聖人の眞實相を明了に頂く爲めに、猶ほ一の譬を擧げて見よう。法然聖人の御敎化と、聖人の御自督とは恰も、鍵と錠との如くである。『和讃』に「五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてゝ、自然の淨土にいたるなれ」、若

し通常の錠であるならば、通常の鍵を以て開き得べし。然るに今五濁惡世の强剛難化の錠前こそ、選擇本願の金剛の信心の鍵ならでは開くことが出來ぬのである。然るに法然聖人の選擇本願の錠を授かりながら、我が身の强剛難化の錠たる事を自覺せいては、五刼思惟の御苦勞が水泡に歸する次第である。實に彌陀の五刼思惟の鍵は、そこばくの業をもちける强剛難化の我等が胸を開くために頂き下されたが親鸞聖人である。此親鸞聖人の御自督は、即ち我等の頂く可き自督である。『歎異鈔』に「されば かたじけなくも わが御身に引きかけて、我等が身の罪惡のふかきほどをも知らず、如來の御恩の高きことをも知らずして、迷へるを思ひしらせんがためにてそふひらけり」。實に聖人の御懺悔なされた罪業深重は、他人のことではない、即ち我等の罪業深重を知らせて下さるのである。聖人の親鸞一人がためなりと頂き給ひし五刼思惟の御恩は、又我等一人々々の爲めに待ち兼ね給ふ御恩である。是れ實に『拯濟無邊極濁惡』の大德音である。「さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の敎法を我も信じ、人にもをしへきかしむるばかりなり」。我如き難化の三機、難治の三病が、本願醍醐の妙藥によりて救はれたり。汝等同病の輩同じく本願醍醐の妙藥を頂け。我如き强剛難化の錠前は、選擇本願の秘鍵によりて開かれたり、汝等五濁惡世の有情、選擇本願を信ずべしと。『信卷別序』に「夫れ以れば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり」とあるが實に是である。洵にこれ聖人九十年の間常に繰返し給ひし御述懷にして、法然聖人の如來選擇本願の敎化より、親鸞聖人の聞其名號信心歡喜と信樂開發したまひし一念の實驗である。

三、聖德太子と親鸞聖人

此に至りて信樂開發の一念といふことを注意せねばならぬ。聖人は願成就の文に乃至一念、至心に廻向したまへりと訓ぜられた。是實に如來廻向といふことの源である。私は青年に分かり安き樣に實驗といふことを言ふ。實驗といふは直接に我等が心中に如來の大悲が徹底攪入して信樂開發の一念、廣大難思の慶心を生することである。聖人が如來廻向と仰せられるは全く直接如來淸淨願心が我等心中に達して一念喜愛心を生ずることである。抑々此廻向の實驗なかりせば上來述べ來りたる聖人の眞實相、即ち罪惡自覺と共に大悲の救

濟を被るといふことが出來ぬ。全體親鸞聖人が獨り法然聖人の選擇本願其儘を我身一人の上に頂かれたは、法然聖人の敎化の下に直に如來廻向の惠に接せられたからである。法然聖人の敎を被りて戰々兢々其敎に違はんとをのみ是懼るゝといふ有樣なれば、畢竟律法的の從順である。順彼佛願故といふは、本願に念佛せよとあるによりて念佛せねばならぬといふ意味ではない。若し然らば服從的態度である、法然聖人の手眞似足眞似口眞似である。順彼佛願故といふは律法的從順でも義務的服從でもない、信仰的の信順である。法然聖人の言の下に直に如來の本願に信順するのである。如來の願心が徹到して從はねばならぬ樣になるのである。他の門侶は法然聖人に對する律法的の從順である、故に形や姿は合ふて居る、念佛は仰せの如く稱へて居る、惜しい哉法然聖人の御精神たる選擇本願を頂いて居らぬ。而して此如來願心を直々心中にいたゞいたのが聖人の廻向の實驗である。そこで聖人の御信心は法然聖人の示されたる選擇本願を信せられたに違ひないが、其信樂開發の實驗といふことなかりせば、法然聖人の選擇本願が親鸞聖人の信心其物となることが出來ぬ。

此如來廻向の實驗そのものこつきては聖德太子の御手引といふことが至大の關係があるのである。聖德太子讃に「聖德皇のあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします」とあるが實に此點である。聖人が流罪已後愚禿親鸞と名乘り、殊に天親曇鸞に私淑したまひし所以のものは、聖人が聖德太子の引導によりて法然聖人の敎化を蒙り、內心に實驗したまひし大慈大悲が全く天親曇鸞の示したまひし往相還相の廻向其儘であるからである。殊に廻向といふことを、普通に言ふが如く衆生より佛に向て廻向する意義を一變して、如來より直に衆生に對して廻向したまふことゝせられたる如きは、曇鸞大師の示されたる他利利他の深義其儘を實驗したまひしものにして、法然聖人の廻向不廻向といふことも意義を一變して、念佛は行者の方よりは不廻向であるが如來の方より廻向であると、御示し下されたのである。『敎行信證』が願力廻向を骨子として組立てられたのも此譯である。しからば如何にして廻向をいただかれたかといふに、即ち聖德太子の御手引を味はねばならぬ。抑々聖人十九歲の時磯長聖德太子の御廟に參詣したまひし時、蒙られたる六句の偈は、聖人をして著しく人生問題に於て御苦勞せしめ奉りたのである。殊に女命根應十餘歲、命終速入淸淨土の靈告に

よりて思召すには、一息追はざれは千載長く往く、何ぞ浮生の交衆を貪て、徒に假名の修學に疲れん、須らく勢利を抛て直に出離を悕ふべしと、頻に道を求めたまひた。されと色塵聲塵猿猴の情尚忙しく、愛論見論翻膠の憑彌堅し、遂に根本中堂枝末靈廟に詣て、特に聖德太子の建立にして其本地たる六角堂の如意輪觀世音に詣して百日參籠の曉靈告を蒙り、歸路四條橋上に聖覺法印に遇ひたまひ、其指導を得て即日吉水法然聖人の禪扃を叩きて、初めて選擇本願を聞きたまひた。茲に多年の間御苦勞なされし胸中の無明は、無碍の光明によりて一時に照耀せられ、圓融至德の嘉號は、忽に多年の志願を滿足せしめられた。是れ即ち信樂開發の一念にして、如來の廻向にあづかりたまひたのてある。『口傳鈔』にある聖光上人が法然聖人に御遇ひなされた場合と比較するに、如何にも著しき對照てある。若し修養學問の立場より法を求むるときは、如何に如法從順に師命に從ふても、修養學問を捨てるとは出來ぬのてある。是鎮西上人が本願に擇び捨てられたる諸行を雜へ行ふた所以てある、しかるに人生問題より進みて盡十方の光明に照され唯一の念佛圓融し來るとき、專ら大悲に感泣するの外はない。如何にも何れの行も及び難きことを自覺するのてある。

如何なる煩惱をも具足することをも自覺するのてある。私自身が御慈悲を喜ぶ身となりてより後五六年、初めて『敎行信證』を味ひし時大に驚愕したるは『信卷』終に引用したまへる『涅槃經』の阿闍世王か煩悶入信の文てある。一々の文句殆ど自己の胸臆を刻ぐらるゝの感がある。而して總序に「淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり、是れ則ち權化の仁齊しく苦惱の群萠を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闡提を惠まんと欲してなり。」とあるは、如何に聖人が人生問題の上より導かれて如來の大悲をいたゝくべきかを示されたかが分かる。『信卷』別序に「眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり」と仰せられたが是てある。宜なる哉聖人は此『涅槃經』の文の前に深刻なる懺悔をなして曰く、「試に知んぬ悲哉、愚禿鸞、愛慾の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばす、眞證の證に近くことを快ます、耻づ可し、傷む可し」と申された。實に難化の三機難治の三病は他人の事にあらず、破戒無戒非僧非俗愛欲名利の愚禿親鸞一人のことであるとの御懺悔である。

此に於て聖人は法然聖人の選擇本願の敎の儘を實現して、

家庭在俗の有樣にて全く無戒名字の比丘として生活を致たされた。是法然聖人の敎の結果として必然來るべき事なれども、此に積極的に之を促し來る動機なくてはならぬ。而して聖人入信の後建仁三年（或は元年とも云ふ）六角堂の夢想の告に「一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」と仰せられた。是普門示現にして薗林遊戲地門の功德、即還相廻向てある。是は聖人が無戒名字の愚禿親鸞として生活せねばならぬやうに餘儀なくせられたのてある。此の如き大變革は決して無戒てもよいと云ふ位のことて出來るものてはない。佛陀の告命としてかくせねばならぬやうになつたのてある。信念としてかくせねばならぬやうになつたのてある。言ひ換へれば信仰の結果として之を家庭的に實現して、親子夫婦相信じて節操を二三にすべからざる樣になつたのてある。而して恰も是れ聖德太子の御家庭の理想其儘を實現されたるものにして、磯長廟崛內の二十句の偈に、「我身救世觀世音、定惠契女大勢至、生育我身大悲母、西方敎主彌陀尊、眞實眞如本一體、一體現三同一身、日域化緣今已盡、還歸西方我淨土」とある同心一體の家庭、在俗同事の化儀を其儘實現せられたものてある。而して是れ磯長告命の六句の偈に、「我三尊化塵沙界、日域大乘相應地」と申された所以にして、大乘佛法の眞意を俗諦人生上に實現する日本佛敎の特色が、此に宗儀となつたのてある。私は殊に聖德太子の靈告によりて吉水入室の時、又六角堂夢想の時、直接佛陀の廻向を知られたることを確信する。勿論廻向は信樂開發の時一度なれとも、其相に至りては往相還相の二樣にあらはるゝのてある。かく言へばとて聖人は在俗の生活を我身の宿報として悲歎し、且つ肉味を貪すること無慚無愧の甚しきなりと懺愧したまふのてある。是『述懷和讃』ある所以にして、又阿闍世王の慚愧を自分の身の上に引受けたまふ所以てある。

而して屢々闍王入信の偈を引きて聖人は大悲の救濟を感謝したまひてある。曰く「如來爲一切常作慈父母當知諸衆生、皆是如來子世尊大慈悲爲衆修苦行如人著鬼魅狂亂多所爲」實に是れ「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すればひとへに親鸞一人がためなりける、云々」の思召てある。拯濟無邊極濁惡といへる御信心其儘てある。此の如く仰き去り信じ來れば、親鸞聖人の御信心は聖德太子によりて人生問題より導かれ、法然聖人によりて選擇本願を授けられ、茲に如來大慈大悲の廻向にあづかりて信樂開發の一念、二種深信

の領解の下に、三朝淨土の宗師の正意たる念佛成佛是眞宗を開闡したまひたのである。故に聖人宣はく、「大師聖人則ち勢至の化身、太子亦觀音の垂迹なり、此故に我二菩薩の引導に順じて如來の本願を弘むるにあり、眞宗此に依て興し、念佛是によりて廣也」と。

四、『敎行信證』

以上述べ來りたるが如く、選擇本願の念佛と如來二種の廻向の實驗とによりて、親鸞聖人の拯濟無邊極濁惡の信心が開發された。而して此の聖人の自督を思ふがまゝに書き表はされたのが、即ち『敎行信證』である。聖人が法然聖人の門下に於て、既に信仰生活を實現し給ひしの後、三十五歳の時流罪の禍を受け、五年の居諸を經たるの後、東國に於て此の如來二種の廻向を宣說し給ひたる有樣は、實に嘗て六角堂夢想中の東方に於ける峨々たる嶽山を面の當り遊歩し給ひ、殊に稻田の草庵に於て惠信尼公と共に、道俗男女を敎化なされたる有樣は、恰も救世菩薩の告命を受けし昔の夢に符合した。而して此の時に當りて聖人其の御自督の儘を書き顯はされたるが即ち『顯淨土眞實敎行信證文類』六卷である。仍て『敎行信證』は如來二種の廻向の實驗を骨子として、三經七祖、廣くは一切藏經の中より、自己の信仰の琴線に觸るゝ文字を類聚して、佛恩の深重なるを感謝せられたのである。而して其の信仰の內容は、法然聖人の敎へ給ひし選擇本願念佛の外は無い。故に『敎行信證』は一面より見れば、聖德太子の靈告の滿足せられたる有樣にして、一面より見れば法然聖人の『選擇集』の內容其儘である。猶ほ言葉を換へて之を言へば、『敎行信證』は天親曇鸞の往還二種の廻向、三信即一の實驗を告白せられたるものにして、其の內容は善導、法然の念佛成佛是眞宗を敷衍せられたるものである。先づ『敎行信證』といふ四法を立てられたる事は、畢竟念佛成佛是眞宗といふ一語を引き延ばしたるものである。『歎異鈔』に「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる、そのほか何の學問かは往生の要なるべきや」と。『敎行信證』は決して學問沙汰をして頂く可きものでは無い。「顯淨土眞實」といふは、「他力眞實のむねをあかせる」といふ事である。「眞實のむね」といふは眞宗である。「もろ〳〵の聖敎」は文類である。「本願」は敎である。「信じ」は信である、「念佛をまふす」は行である。「佛になる」は證である。して見れば、「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる」といふは、「顯淨土眞實敎行信證文類」といふことである。之をも一層約めたならば、「念佛成佛是眞宗」である。「念佛成佛是眞宗」の反對が、「萬行諸善是假門」である。此の眞假の區別を顯はしたのが、『眞佛土卷』及び『化身土卷』である。斯くの如く、「念佛成佛是眞宗」の一句より、六軸の聖敎は流れ出づるのである。其の「念佛成佛是眞宗」の源は、法然聖人の「選擇本願念佛」である。さればこそ『行卷』には之を引きて宣はく、「明かに知ぬ。是れ凡聖自力の行に非ず。故に不廻向の行と名くる也。大小の聖人重輕の惡人、皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし」とある。是れ實に法然聖人の選擇本願念佛が即ち如來廻向となる點にして、『歎異鈔』に所謂「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人のおほせをかふむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり」とあるが是れである。古來『行卷』に『選擇集』の首尾を引用したるは、其の全部を引用したるの意味なりと解するが、勿論然うてもあらんが、寧ろ「選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」といふ丈けて、法然聖人の御敎化は盡されて居るといふことであらう。『歎異鈔』に於て「唯念佛して

かせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる」といふは、「顯淨土眞實敎行信證文類」といふことである。之をも一層約めたならば、「念佛成佛是眞宗」である。「念佛成佛是眞宗」の反對が、「萬行諸善是假門」である。此の眞假の區別を顯はしたのが、『眞佛土卷』及び『化身土卷』である。斯くの如く、「念佛成佛是眞宗」の一句より、六軸の聖敎は流れ出づるのである。其の「念佛成佛是眞宗」の源は、法然聖人の「選擇本願念佛」である。さればこそ『行卷』には之を引きて宣はく、「明かに知ぬ。是れ凡聖自力の行に非ず。故に不廻向の行と名くる也。大小の聖人重輕の惡人、皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし」とある。是れ實に法然聖人の選擇本願念佛が即ち如來廻向となる點にして、『歎異鈔』に所謂「親鸞におきては唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人のおほせをかふむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり」とあるが是れである。古來『行卷』に『選擇集』の首尾を引用したるは、其の全部を引用したるの意味なりと解するが、勿論然うてもあらんが、寧ろ「選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」といふ丈けて、法然聖人の御敎化は盡されて居るといふことであらう。『歎異鈔』に於て「唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せ」といふたが之であらう。其處て前の法然聖人と親鸞聖人の節に於て、法然聖人の選擇本願の意味を詳しく述べたが、親鸞聖人は『選擇集』本願章に於ける此の意味を詳しく述べたが、親鸞聖人は『選擇集』本願章に於ける此の意味の文字を少しも引きて置かれぬ。此の點に於て少からず不審を抱いて居つた。然るに之は前にも述べたるが如く、寧ろ其の選擇本願を信じて、我が身の罪惡を自覺されたる自督に於て顯はされてある。即ち『信卷』至心釋に曰はく、「一切の群生海無始より以來乃至今日今時に至る迄、穢惡汚染にして淸淨の心無く、虛假諂僞にして眞實の心無し」とある。是れ實に『選擇集』に所謂、貧窮困乏、愚鈍下智、少聞小見、破戒無戒等にして、極惡最下の有樣である。『選擇集』は之を如來の本願の呼聲に於て言ひ、『敎行信證』は之を聖人の自覺に於て示されてある。而して此の不淸淨不眞實は、『選擇集』に所謂、阿彌陀佛法藏比丘の昔平等の大悲に催うされて、稱名の本願を立て給ひし起りである。故に『信卷』次の文には「是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憐して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じ給ひし時、三業の修したまふ所、一念一刹那も淸淨ならざる事無く、眞心ならざること無し」とある。此の「是を以て」の一語實に千鈞

の力がある。即ち我等の不清淨不眞實は、如來の清淨眞實の御苦勞の源にして、所謂「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そこばくの業をもちける身にてありけるを」といふ御自督の儘である。斯の如く『敎行信證』に於ては『行卷』に於て、「唯念佛して彌陀に助けられ參らすべし」との選擇本願念佛の一言を擧げて他は皆な之を信じたる自督の上で顯はされてある。『歎異鈔』に「何れの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と罪惡を自覺したると同樣である。此の一例は『選擇集』全體と『敎行信證』全體との關係を遺憾無く現はしたるものにして、『敎行信證』全體は聖人が『選擇集』を信じ給ひし告白と言ふてよい。『敎行信證』後序に、『選擇集』を擧げて、「眞宗の簡要念佛の奧義斯れに攝在せり。見る者諭り易し。誠に是れ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり」と、師敎の恩厚を仰ぐ事至れり盡せり。而して其の歡喜の餘り、眞宗の詮を鈔し、淨土の要を撫ひて、『敎行信證』を作られたのである。故に其の內容は『選擇集』なれども、悉く聖人が之を信じ之を消化したる形に於て告白されてある。故に『敎行信證』は其の形に於ては少しも『選擇集』の俤をも見ることは出來ぬ。されど其精神に於ては『選擇集』其の儘である。『選擇集』十六章段、悉く諸行を廢して、念佛を立てゝある。是れ『行卷』の念佛諸善比較對論にして、『敎行信證』全體としては、眞假の區別是れである。殊に『行卷』は選擇本願念佛を擧げたるものにして、又之より出づる所の信證等を、生み來るものである。さればこそ光明名號兩重の因緣を擧げ、信心の業識、報土の眞身を生み出し、最後に念佛成佛是眞宗と結んである。

斯くの如く『敎行信證』は『選擇集』を信受したる自督に於て顯はされたるが故に、『選擇集』に於て消極的に言ひ表はされたるものが、『敎行信證』に於ては皆な積極的の形を採つてある。第一書籍編纂の形に於て、『選擇集』は聖道淨土を分別して淨土三部經の外一切を捨てゝ之を引用せず、然るに『敎行信證』に至りては、一切經を皆な彌陀の本願を說きたるものとして、『涅槃經』の一道も『華嚴經』の一無碍道も、皆な念佛のことゝしてある。『選擇集』には發菩提心、信第一義等を擇び捨てたるも、『敎行信證』に於ては、淨土の大菩提心として、願作佛心度衆生心を擧げ、念佛を以て第一義乘、誓願一佛乘と主張してある。殊に『選擇集』の廻向不廻向が、『敎行信證』に於ては大積極的の問題となつて、念佛は凡聖自力の行者の廻

向にあらず、故に不廻向と名く而して之れ實に如來本願力廻向の大行なり、大信なりといふやうになりて來たのである。斯くの如く『選擇集』に於ける專修念佛が、『敎行信證』に於て大積極的の自督に顯はれ來た所以のものは、即ち上に述べたる聖德太子の靈告の導きによりて、如來廻向の實驗に輝いたる爲めである。其の事は既に前節聖德太子との關係の時に詳說したるが如く、抑々聖人が往還二種の廻向を骨子として、『敎行信證』を編まれたのが、此の實驗から來つたのである。故に仔細に眼光を鋭くして『敎行信證』の文字を檢するに、坐ろに太子の告命に照應する節々がある。『行卷』一乘海の御自釋は太子の御精神たる『勝鬘經』の文である。私かに之を推するに、「日域大乘相應地」とある日本に相應する大乘は、即ち此の誓願一佛乘の念佛なりとの意味なる可し。何んとなれば、聖德太子の導きによりて遇はれたのが法然聖人なれば、聖德太子の大乘は、法然聖人の念佛なりとの事である。『愚禿鈔』に「本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり」といふも、告命の「命終速入淸淨土」が法然聖人に遇ひ奉りて、選擇本願を信受せられたる一念に於て實現したればなり。全體即得往生を信の一念に於て斷ずることは、殆んど常識以外の事で、斯くの如き實驗によりて自得せられたる御敎化である。『愚禿鈔』の次の文に「他力の金剛心なり、便ち彌勒菩薩に同じ」とあるは、「善信々々眞菩薩」の告命の實現したるのである。『和讃』に「佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり」とあるが、此の意味であらう。信仰の一念に眞の佛弟子と言ひ、正定聚の菩薩と言ふことは、聖人の此の實驗より來りたのである。全體現生正定聚とか、便同彌勒とかいふことは、是れ又實驗ならでは、文字上では言へぬことである。殊に速入の文字は『行卷』に『能令速滿足』と言ひ、又「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言ひ、殊に三願的證は其の速かなる所以より起り、圓融圓滿頓極頓速といふ如き、皆な此の破闇滿願信樂開發の實驗より言はれたるものである。斯くの如く頂き來れば、念佛成佛是眞宗の御敎化を如來廻向の實驗によりて頂かれたる御自督を、有るが儘に告白せられたのが『敎行信證』である。私は過古十年間聖人の御形見たる此の聖敎を每朝拜讀させて貰うて居る。是れ聖人が『選擇集』を頂いて悲喜の涙に堪えざるが如く、又天親曇鸞兩菩薩の『淨土論』『註論』を奉持頂戴し給ひし如く、我等も此の聖敎を拜し奉るを得て、多生曠劫の

宿緣を感謝し奉る事である。實に此の聖敎は如來の本願其の儘にして、時に古今の別あり、所に東西の異ありと雖も、其光明は永久にして、所として照さゞる無く、其生命は無盡にして衆として潤ほさゞる無し。聖人一代の御敎化此一部に攝在せり。晩年『略文類』を作り給ふも、畢竟此聖敎の摘要である。『愚禿鈔』を作り給ふも、『行信』二卷の要を擧げて愚禿の自督を述べ給ひたのである。『二門偈』は聖人の私淑し給へる天親曇鸞を中心として願力成就の五念門を述べて入出二門他力を示し給ひたのである。斯の如く聖人の眞實相は此一部に盡されてある。『敎行信證』と三帖の『和讃』と、如覺上人の『御傳鈔』の三部存在せば、淨土眞宗は千古に傳へらるゝこと炳焉である。

五、『西方指南鈔』及『聖德皇太子奉讃』

昨年の春伊勢一身田高田專修寺に參詣し、御法主臺下の特別の許可によりて、親鸞聖人眞筆の『西方指南鈔』六卷と、『親鸞夢記』一軸（求道六卷八號に掲載）を拜することを得た。今茲に『西方指南鈔』について卑見を披瀝しようと思ふ。抑々『西方指南鈔』は法然聖人の御說法事（逆修說法）、日記（三昧發得記）、御夢想記、時々の御話、臨終行儀、七個條起請文、起請沒後二個條事、源空聖人私日記、時々の說法御消息、十三問答、四種往生事、等、要するに法然聖人の全集とも謂つ可きものである。康元元年二月より、同二年三月迄に之を書し、再び之を校し、又は書寫されたるものである。高田御眞本の筆跡を拜するに、筆力勁勁にして墨恨香あり模擬したる跡毫も無い。但し最後の奥書に、「草本云、康元元丙辰十一月八日、愚禿親鸞八十四歲書之、德治三歲戊申二月中旬第五、書寫之」とある。拜覽の時此の奥書きの筆跡本文と同じきや否やを見落したるが故に、此の奥書は祖師の眞筆に對して書き加えたるか、若くは最後の卷丈け他の筆になるか、若しくは全體が聖人の眞跡に非ずして、德治年中の書寫本たるか、茲に斷言する事は難い。蓋し祖師聖人直弟中には頗る聖人の筆跡に酷似したる文字を書く人多かりし故、若し德治年中之を書寫したものとすれば、筆跡は聖人に非ずと雖も、此鈔が聖人の手に出てたることは益々明かとなる。何んとなれば斯の如く寫本たる事を明記する以上は聖人の筆跡を模して僞作せんとする意志を認むることが出來ぬ故である。何はともあれ、行文の樣子を見るに頗る古きものにして、大に價値の存するものである。而して我等が最も注意を拂ふべきことは、覺如上人が確かに此書を尊重されたることである。

一　此鈔中の末に源空聖人私日記といふ漢文にて書きたる小傳がある。是が覺如上人の『拾遺古德傳』の原本らしい。即此傳を拾遺されたるものであろう。兩本對照すれば歷々明瞭である。御往生の記事に曰、「三春何節哉、釋尊唱レ滅、聖人唱レ滅、彼者二月中旬五日也、此者正月下旬五日也、八旬何歲哉、釋尊唱レ滅聖人唱レ滅、彼八旬也此八旬也。」とある。又結文に「定ヲ知ヌ十方三世無央數界ノ有情無情、遇ニ和尙興世一、初悟ニ五乘濟入之道一、三界虛空四禪八定天王天弗、依ニ聖人誕生一、忝拔ニ五衰退後之苦一、何況末代惡世之衆生、依ニ彌陀稱名之一行一、悉遂ニ往生素懷一、源空聖人傳說興行ノ故也」等最も著しく、其他此私日記を原本として大に拾遺したるが如し。

二　此鈔及び『拾遺古德傳』七個條起請文の連名全く同じ。而して嵯峨二尊院の連名と異りて二十一人目に善信とあり。恐くは、聖人記憶の儘書き列ねたまひしならん。

三　此鈔に本願に體用あるべしと論じて、本願の體に約してこゝろうれば本願や行者、行者や本願、本願や名號、名號や本願とたゞ一に混亂するなり。用に約してこゝろうれば、名號や行者行者や名號といはるべし、」とあり。是れ『執持鈔』に「されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願といふこのいはれなり」とある。是全く此鈔を用ゐられたのである。

之を以て觀れば覺如上人が此鈔を用ゐられたことは明らかである。上人の『御傳鈔』を以て親鸞聖人唯一の傳記とまて信ずる我等は、上人が信じたまひし此鈔を信ぜずには居られぬ。上人の時代には高田とは往復頻繁にして、現に『報恩講式文』の如きは、上人より高田へ一本を贈られたものらしい。次に親鸞聖人の他の御文と對照して聖人の手に成るらしき點を擧ぐれば、

一　『敎行信證』後序に、同二年壬申寅月下旬第五日午時入滅、奇瑞不レ可ニ稱計一見ニ別傳一とあり。而して此鈔法然聖人臨終行儀の文正に之に當る。

二　源空和讃にあらはれたる事實は、源空聖人私日記及法然聖人臨終行儀に符合す。

三　善導『禮讃』の文を引用したまふに、皆彼佛今現在成佛に作る。『口傳鈔』に曰『世流布の本には在世とあり、しか

るに黒谷本願寺兩師ともにこの世の字を略してひかれたり云々』

之を以て觀れば親鸞聖人が此鈔を自ら編されたるか少くとも此鈔を書寫されたることは確かである。聖人は聖覺法印の『唯信鈔』隆寛律師の『後世物語』自力他力事等を特に晩年に書寫したまひた。して見れは先師の片言隻語をも書寫して、自ら味ひ人にも味はさしめんとの御企は尤ものことにして、益々貴きことである。自然法爾の御教化、義なきを義とすの御教化皆先師の御言を味ひなされたのである。して見れは益々此書を編輯若くば書寫されたものらしい。

前に既に述べたるが如く、『教行信證』だにあらは眞宗の眼目、聖人の精神は歴々として頂き得べきである。さりながら『教行信證』は自督にして、其自督の出て來る淵源、即ち法然聖人の御教化を一一御頂きなさる點が難有い。「よき人の仰を蒙りて信するほかに別の仔細なきなり」と仰せらるゝ親鸞聖人、いかて法然聖人の御教化を頂かざるべき。全體親鸞聖人の信樂開發を重んするの餘、法然聖人の念佛成佛是眞宗を其儘信受されたる點につきて、動もすれば疎かに看過する虞がある。是は大なる僻事である。此弊を救ふが爲に特に此鈔を拜讀することを勸むる。『選擇集』に曰、「靜以善導觀經疏者是西方指南、行者目足也、然則西方行人必須二珍敬一矣」實に「よき人の仰」である。而して從來親鸞聖人御己證として考へられたることが、法然聖人の御教化として現はれて來ることになる。例へば眞化二身の別、『末法灯明記』破戒無戒の文七難消滅の文等『教行信證』を偲ふべし。其他本鈔を繙きて玩味奉持すべし。今便宜の爲に特色ある個所、及び難有個所を拔萃して見よう。

（中本云）或人念佛之不審を故聖人に奉問曰。第二十の願は大綱の願なり、係念といふは三生の內にかならず果遂すべし、假令通計するに、百年の內に往生すべき也云々。これ九品往生の義意の釋なり。極大遲者をもて三生に出さるこゝろ、かくのごとく釋せり。

又阿彌陀經の己發願等は、これ三生之證也と。又云阿彌陀經等は淨土門の出世の本懷也。法華經者聖道門の出世の本懷なり云々。望ところはことなり、疑ふに足さる者也。

又云我安置するところの、一切經律論はこれ觀經所攝の法也。

又云地藏等の諸菩薩を蔑如すべからず、往生以後伴侶たるべきかゆへなりと。

又云近代の行人、觀法をもちゐるにあたはす。もし佛像等を觀せむは運慶康慶が所造にすぎし、もし寶樹等を觀せは、櫻梅桃李之花菓等にすぎし。しかるに彼佛今現在成佛等の釋を信して、一向に名號を稱すへき也と云。たゞ名號をとなふるに、三心おのづから具足する也といへり。

又云念佛はやうなきをもてなり、名號をとなふるほか、一切やうなき事也といへり。

又云諸經の中にとくところの極樂の莊嚴等は、みなこれ四十八願成就の文也。念佛を勸進するところは、第十八の願成就の文なり。觀經と三心小經の一心不亂、大經の願成就の文の信心歡喜と、同し流通の歡喜踊躍と、みなこれ至心信樂之心也と云り。これらの心をもて念佛の三心を釋したまへる也と云々。

又云玄義に云く。釋迦の要門は定散二善なり、定者息慮凝心なり、散者廢惡修善なりと。弘願者如大經說、一切善惡凡夫得生といへり。予がことときはさきの要門にたえす、よてひとへに弘願を憑也と云り。

又云導和尙深心を釋せむがために、餘の二心を釋したまふ也。經の文の三心をみるに一切行なし、深心の釋にいたりて、はじめて念佛の行をあかす所也。

又云往生の業成就、臨終平生にわたるべし、本願の文に別にえらばざるかゆへにと云り。惠心のこゝろ平生の見にわたる也と云り。

又云往生の業成は念をもて本とす、名號を稱するは念を成せむかため也。もし聲をはなるゝとき、念すなはち懈怠するかゆへに。常恒に稱唱すれは、すなはち念相續す、心念の業成をひくかゆへ也。

又云稱名の行者、常途念佛のとき、不淨をはゞかるべからず、相續を要とするがゆへに。如意輪の法は不淨をはゞからず、彌陀觀音一體不二也。これをおもふに善導の別時の行には、淸淨潔齋をもちゐる、尋常の行これにことなるべき歟。惠心の不論時處諸緣之釋、永觀の不論身淨不淨之釋さだめて存するところなる歟と云。

又云善導は第十八の願、一向に佛號を稱念して往生すと云り。惠心のこゝろ觀念稱念等みなこれを攝すと云り。もし要集のこゝろによらば、行者においてはこの名をあやまちてむ歟と。

又云第十九の願は諸行の人を引入して、念佛之願に歸せしめむと也。(下略)

又云餘宗の人、淨土門にその志しあらむには、先つ往生要集をもてこれををしふべし、そのゆへはこの書はものにこゝろえて難なきやうに、その面をみえて初心の人のためによき也。雖然眞實の底の本意は、稱名念佛をもて專修專念を勸進したまへり、善導と一同也。

又云餘宗の人、淨土宗にそのこゝろざしあらむものは、かならず本宗の意を棄べき也。そのゆへは聖道淨土の宗義各別なるゆへ也とのたまへり。

(中本末云)或人云阿彌陀佛の慈悲名號餘佛に勝。並に本願の體用の事。設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺云々。十方衆生と云は、諸佛の敎化にもれたる常沒の衆生也。この衆生をあはれみおぼしめすかたに諸佛の御慈悲も阿彌陀佛の御慈悲におなじかるべし。これは總願に約す。別願に約する時は、阿彌陀佛の御慈悲は、餘佛の慈悲にすくれたまへり。そのゆへはこの常沒の衆生を、十聲一聲の稱名の功力を以て、無漏の報土へ生せしめむと云御願によて也。阿彌陀佛の名號の餘佛の名號にすぐれたまへると云も、因位の本願にたてたまへる名號なるがゆへに勝れたまへり。しからずは報土の生因となるべからず、餘佛の名號に同すべし。抑々阿彌陀佛の本願と云は、いかなる事ぞと云に、本願と云は、總別の願に通ずといへとも、言總意別にて、別願をもて本願となつくる也。本願と云ことは、もとのねがひと訓する也。もとのねがひと云は、法藏菩薩の昔常沒の衆生を一聲の稱名のちからをもて、稱してむ衆生を我國に生ぜしめむと云こと也。かるかゆへに本願といふなり。

問、本願について、體用あるべし、その差別いかんぞ。

答、本願と云は、因位にわれ佛になりたらむときの名を、となへむ衆生を極樂に生せしめむと、ねがひたまへるゆへに、法藏菩薩の御こゝろをもて本願の體とし、名號をもては本願の用とす。これは十劫正覺のさき兆載永劫の修行をはじめ、願をおこしたまへる時の、法藏菩薩に約して體用を論ずる也。今は法藏菩薩は因位の願成就して、果位の阿彌陀佛となりたまへるがゆへに、法藏菩薩おはしまさざれば、法藏菩薩に約して、本願の體用を論すべきにあらず。たゞしあたえて云へば本願の體用あるべし。體と云について、二の心あ

るべし。一には行者をもて本願の體とし、二には名號をもて本願の體とす。まつ行者をもて本願の體とすと云は、法藏菩薩の本願に成佛したらむ時の名、一聲も稱してむ衆生を、極樂に生せしめむと願したまへるが故に、今信して一聲も稱してむ衆生はかならず往生すべし。此能稱の行者の往生する處をさして、行者をもて本願の體とすとは、心うべきなり。問、我佛に成たらむ時の名を、稱せむものを生せしめむと、本願には立たまへるかゆへに、名號を稱する者を、やかて本願の體ともこゝろうへしや。

答、これについて與奪の義あるべし。與て云へは行者の正く蓮台にうつりて、往生するところをもて、本願の體とし、奪云へは往生すべき行者なるかゆへに、當體能稱の者をさして本願の體とすべし。行者について本願の體と云時は、別に用の義なし。蓮臺に託して往生已後の增進佛道をもて用とす。これは極樂にての事也。次に名號をもて本願の體とすと云は、これも成佛の時の名を稱せむ衆生を、生せしめむと願じたまへるがゆへに、信じて名を唱てむ衆生はかならず生すべければ、名號をもて本願の體と云也。名號を唱つる衆生の往生するは名號の用也。今名號をもて本願の體とすと云は、法藏菩薩の御こゝろのそこをもて、本願の體とすといひつる時は、用といはれつる名號也。しかるを今はまさしく、名號をもては本願の體と云也。事によりてかはるなり。喩はともしびのひかりをもてこゝろうべし。ともしびのあかく、もえあがりたるは火の用なり。燈によりて闇はれて明なるところの光は火の用なり。この光の明なるをもて體とする時は、その明の中に黑白等の一切の色形のみゆるは用なり。かくのごとく用をもて體とも云事、常の事なりしるべし。行者の往生するをもて、本願の體と云ふことは、實には名號を稱せずして、往生すべき道理なし。名號により往生すべし。しかりといへども、かくのごときの事は約束によりて云時は、行者の往生をもて本願の體ともいはるべし。名號を本願の體と云時は、稱する行者の往生するは名號の用なり。しかれば行者はあるひは本願の體、あるひは名號の用にも決定すべきなり。この道理によて本願の體に約してこゝろうれば、本願や行者、行者や本願、本願や名號、名號や本願と、たゞ一に混亂するなり。用に約してこゝろへつれば、名號や行者、行者や名號といはるべし。詮するところは體なくば用あるべからず、用は

體によるがゆへに。本願と行者、たゞ一ものにて一としてはなれざるなり。

問、法藏菩薩の本願の約束は、十聲一聲なり。一稱ののちは法藏菩薩の因位の本誓に心をかけて、名號をば稱すべからざるにや。

答、無沙汰なる人は、かくのごとくおもひて、因位の願を緣して念佛をも申せば、これをしゑたるこゝちして、願を緣せざる時の念佛をば、ものならずおもふて、念佛に善惡をあらするなり。これは無案内のことなり。法藏菩薩の五劫の思惟は、衆生の意念を本とせば、識揚神飛のゆへ、かなふべからずとおぼしめして、名號を本願と立たまへり。この名號はいかなる亂想の中にも稱すべし。稱すれば法藏菩薩の昔の願に、心をかけむとせざれども、自然にこれこそ本願よとおぼゆべきは、この名號なり。しかれば別に因位の本願を緣せむとおもふべきにあらず。

問、本願と本誓と、その差別いかんぞ。

答、我成佛の時の名を稱せむ衆生を、生せしめむと云は本願也。もしむまれましまくは、佛にならしと云は本誓也。

總じて四十八願は法藏菩薩のむかしの本願也。この願にこたへたまへる佛果圓滿の今は、第十九の來迎の願にかぎりて、化度衆生の御方便は、おはしますべきなりと云なり。阿彌陀佛の名號は餘佛の名號に勝たまへる本願なるがゆへなり。本願に立たまはすば、名號を稱すとも無明を破せざれば、報土の生因となるべからず、諸佛の名號にをなしかるべし。しかるを阿彌陀佛は、乃至十念若不生者不取正覺とちかひて、この願成就せしめむがために、兆載永劫の修行をおくりて、今已成佛したまへり。この大願業力のそひたるがゆへに、諸佛の名號にもすぐれ、となふればかの願力によりて、決定往生をもするなり。かるがゆへに、如來の本誓をきくに、うたがひなく往生すべき道理に住して、南無阿彌陀佛と唱てむ上には、決定往生とおもひをなすべきなり。たとへばたきものゝにほひの薰せる衣を身にきつれば、みなもとはたきものゝ、にほひにてこそありと云とも、衣のにほひ身に薰するがゆへに、その人のかうばしかりつると云ふがごとく、本願薰力のたきものゝ匂は名號の衣に薰し、またこの名號の衣を一度南無阿彌陀佛とひききてむものは、名號の衣の匂身に薰するがゆへに、決定往生すべき人なり。大願業力の匂と云は、往生の匂なり。大願

業力の往生の匂、名號の衣よりつたわりて、行者の身に薰すと云ふ道理によりて、觀經には若念佛者、當知此人、是人中芬陀利華と說なり。念佛の行者を蓮華に喩ることは、蓮華は不染の義。本願の清淨の名號を稱すれば、十惡五逆の濁にも、そまらざるかたを喩たるなり。また觀世音菩薩、大勢至菩薩、爲其勝友と云り。文のこゝろはこれも往生の匂身に薰せる行者は、かならず往生すべし。これによつて善導和尙も、三心具足の者をば、極樂の聖衆に接したまへり。極樂の聖衆と云は、因中說果の義なり。聖衆となる道理あれば、當時よりして、二菩薩も肩をならべ、膝をまじえて勝友となりたまふといふこゝろなり。命終の己後は、往生して佛果菩提を證得すべきによつて、當座道場生諸佛家とときたまへり。かるがゆへに一念に無上の信心をえてむ人は、往生の匂薰せる名號の衣を、いくへともなくかさねきむとおもふて、歡喜のこゝろに住して、いよ〳〵念佛すべしと云り。

他の諸書と對照して信ずべき點を擧ぐれば、

一　『安心決定鈔』に黑谷聖人の御料簡として出だせる四種往生の事、此鈔下末に出でたり。

二　了惠の漢和語錄と比較するに、其已前に存在したること確かにして、此鈔より採錄したるもの多きが如し。『漢語燈鈔』十卷に曰、指南鈔云答二空阿彌陀佛一書也とされど、今の『指南鈔』には其文なし。『和語燈錄』の終には臨終行儀の文の眞僞知り難しといへり。

三　法然聖人傳の何れよりも最古のものなること。

嗚呼法然聖人七百年忌と親鸞聖人六百五十年忌とを迎ふるに當りて、親鸞聖人の手に成れる法然聖人の語錄『西方指南鈔』を拜讀し、且つ世上に紹介することは、洵に慶喜に堪えざることである。

親鸞聖人晩年に於ける法然聖人の語錄を拜すると同時に、又聖德太子に關する聖人晩年の作を頂かねばならぬ。抑々晩年に至りて一入聖德太子に關する事が多い。建長七年八十三歲の御作として、『皇太子聖德奉讃』七十七首といふものがある。此の御眞蹟は斷片として諸方に散在してある。貝塚願船寺にある「墓所を點しおはりにき云々」の四首、周防國德應寺には「往昔夫人とありし時云々」一首がある。而して從來より此和讃は刊行せられてあつた。六角堂より始めて、終りに憲法を擧げ、最後に次の如く奧書してある。

憲章の第二にのたまはく

三寶にあつく恭敬せよ
四生のついのよりどこゝ
萬國たすけの棟梁なり
いつれのよいつれのひとか歸せざらむ
三寶によりまつらずば
いかでかこのよのひと〳〵の
まかれることをたゝさまし
とめるものゝうたへは
いしをみづにいるかことくなり
ともしきものゝあらそひは
みつをいしにいるゝにたりけり

南無救世觀音大菩薩　哀愍覆護我
南無皇太子勝鬘比丘　願佛常攝受

是緣起文ハ納ニ置ケリ金堂ノ内藍ニ不ニ可ニ披見一ス手跡猥シ

乙卯歳正月八日

拜見奉讃ノ人者
南無阿彌陀佛
可唱可唱

建長七歳乙卯十一月晦日書之

愚禿親鸞 八十三歳

文松子傳曰

大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子　是故方便從西方
誕生片州興正法　我身救世觀世音　定慧契女大勢至
生育我身大悲母　西方教主彌陀尊　眞實眞如本一體
一體現三同一身　片域化緣今已盡　還歸西方我淨土
爲度未世諸衆生　父母所生血肉身　遺留勝地此廟廟
三骨一願三尊位　過古七佛法輪所　大乘相應功德地
一度參詣離惡趣　決定往生極樂界
涅槃經言　如來爲ニ一切ノ常作ニ慈父母一ト　當レ知諸衆生皆
是如來子ナリ　世尊大慈悲　爲レ衆修ニ苦行一　如下人著ニ鬼魅一
狂亂多中所爲上

初は磯長廟廟の御文である。即ち聖德太子の信仰的家庭にして、親鸞聖人の理想である。加賀專光寺に朝圓法眼の聖德太子の添書として、我身救世觀世音已下八句の御眞筆がある。是實に確實なるものにして、聖人が聖德太子の化儀に則りたまふたといふことは、誰も言ふ所なるも、此の如き明瞭なる御手蹟が遺りてあるといふことは、實に千古の光である。而して引續きて『涅槃經』の阿闍世王入信讃佛の偈「如來爲一切云々」の文を擧げなされたは實に難有い。此文も亦所々に御直筆がある。京都下間九鬼三郎氏の祖師眞筆の九字名號の下の銘が此偈である。又善蓮に下された和讃數首及經文の御直筆の終に此偈が書きてある。而して此奥書ある七十七首の『聖德皇太子奉讃』は何れにあるか、分からぬ。高田專修寺にあるのは整頓されて七十五首となり、文松子傳曰已下の奥書はないとの事である。康元元年八十四歳二月九日には、蓮位房が聖德太子が聖人を禮せらるゝ夢を見た。翌康元元年同月同日聖人「彌陀の本願信ずべし、本願信ずるひとはみな、攝取不捨の利益にて、無上覺をばさとるなり」との靈告を得られた。恐くは聖德太子の靈告であろう。同年二月三十日の御作として『大日本國粟散王聖德太子奉讃』一百十四首ある。守屋征代、衡山、等より、家庭、臨終、等が書いてある。眞蹟は八代願永寺に在りと聞けど、何れの所か不明である。若し知られる人あらば知らしていたゞきたい。そして「彌陀の本願信ずべし」の靈告が因緣となりて『正係未和讃』を御製作なされ、最後に皇太子聖德奉讃十一首を作りたまひ、正嘉二年九月二十四日御歳八十六歳とある。其最後の讃に曰く、

多生曠劫この世まで
あはれみかふれるこの身なり
一心歸命たへすして
奉讃ひまなくこのむへし
聖德皇のおあはれみに
護持養育たへずして
如來二種の廻向に
すゝめいれしめおはします

伏して過去十有五年間を回想して、仰て佛恩師恩の深遠なるを信知し、此大遠忌に遇へる冥加を慶び、虔んで曠劫多生の護持養育を感謝し奉る。南無阿彌陀佛。

講話

醍醐の妙味

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

一

今日の題は『醍醐の妙味』であります。之は『涅槃經』の中に五味の喩へといふ事がありて、釋尊の敎を段々に分類したと言はんか、釋尊一代の說法を五つに分けて、五つの味ひに喩へてある。之は佛敎では名高き事柄故、其處の御文を拜讀しますと、

善男子譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生蘇を出し、生蘇より熟蘇を出し、熟蘇より醍醐を出す、醍醐最上にして、若し服すること有る者は、衆病皆な除る、有らゆる諸の藥は悉く其の中に入るが如し。善男子佛も亦是の如し。佛より十二部經を出す、十二部經より修多羅を出す、修多羅より方等經を出す、方等經より般若波羅密を出す、般若波羅密より大涅槃を出す。猶し醍醐の如し。醍醐と言ふは佛性に喩ふ。佛性は即ち是れ如來、善男子是の如きの義の故に、說て如來所有の功德は無量無邊不可稱計と言へり。

と、斯ういふ御文であります。善男子牛より乳を出し、其の乳から酪を出す。之は印度の牛乳の製法故、能く分からぬも、酪は牛乳の固つたものであるとのことである。其の酪より生蘇を出す。之も聞くと、牛乳の固つたものを、も一つ濃くしたものであるそうである。其の生蘇より、熟蘇を出し、夫れがも一つ濃くなりて、夫れが醍醐の極り無き味ひである。醍醐は最上の味ひで、之を服する者は衆病悉く直る。善男子佛も亦斯くの如し、佛より十二部經を出す。――十二部經とは佛が說法の時、或は譬喩を以て說き、或は因緣を以て說き、種々夫れ等の事柄を以て說かれたのが十二通りある、故に十二部經である。其の十二部經より修多羅を出す。――修多羅とは、即ち文字になつた經文である。其の修多羅の經文の中より、方等經を出す。――方等經とは諸佛淨土の事を說いたものが方等經である。其の方等經より般若波羅密を出す。――般若波羅密は、即ち大般若經である。其の大般若より大涅槃を出す。此の大涅槃は佛敎最上の味ひであつて、猶し醍醐の如くである。醍醐といふは即ち此の最後の涅槃佛性の味ひに喩へたものである。佛性は即ち是れ如來、善男子是の如きの義の故に、說て如來所有の功德は無量無邊不可稱計と言つたのてある云々といふ經文であります。

さて之は佛敎で名高い醍醐といふ言葉のもとを申したのであります。處が之が極めて有難い味ひ故、今日は之に就きお話すると、複雜な話になりますけれども、此の五味の喩へを天臺宗では、天臺の智者大師が非常な學者て、――今迄の佛敎の學問は殆んど天臺宗から出たと言つてもよいのてある。親

鷲聖人も法然聖人も天臺宗から出られた位で、學問としては天臺宗は實に偉らい。其の天臺宗の學問の上で、佛の說法を年代の次第により五つに分け、初めに佛華嚴經を說かれたけれども、華嚴經では分かり兼ねたから次には阿含經を說かれた、次には方等經を、次には般若經を、而して最後に法華と涅槃經とを說かれたといふ此の五時の敎といふ事がある。此の五時に當てはめて智者大師は、此の五味の喩を說いて居られるのであります。

處が親鸞聖人は之を左樣な六かしき事にせず、此の文を直ぐ『眞佛土』卷中に入れ、此の最後の醍醐といふは、佛說法の最後なる涅槃經の說法に於て、提婆、阿闍世の如き逆惡の者、韋提希夫人の如き五障三從の女人迄が、阿彌陀如來の本願一つて救はれた、之を醍醐と言はれたのである、故に切り詰めて言ふと、佛直きく〳〵の說法の最後に行き、眞の佛の惠みのごく生粹の現はれたのが、阿彌陀如來の本願南無阿彌陀佛てあつて、之が一代佛敎の最後の味ひである。夫故『涅槃經』に最後の大涅槃を醍醐とある此の醍醐は此の本願醍醐の妙藥の事を言はれたのてあると、此の喩を味はつてお出になるのてあります。

之は實に、有難い思召て、此の喩えは今言ふ如き、歷史的に五時の敎てあるなどと六かしく言はず、喩え其の儘に頂かせ貰うた方が有難いのてある。牛より乳を出し、之を濃くすると酪が出來、之をも一つ濃くすれば生蘇が出來、更に之を純にすれば熟蘇を生じ、夫より最後に味ひ極りの無い醍醐が出來る。其の醍醐は此の上無い味ひてあつて、之を服する者は諸病悉く直る。夫れと同じく佛說法の時に、或は因緣を以てお說き下され、或は譬喩を以てお說き下され、丁度夫等十二通りの御說法がある。其の十二通りの御說法の中より、文字に集めて即ち修多羅の經典が出來、更に其の中より方等經とて廣く諸佛淨土の有樣を說いて下された御經が現はれ、而して夫れが更に純になつたのが『大般若』六百卷の一切皆空の悟りてあると言ふと、直ぐに皆んなが悟りといふことを考へる。併しながら其の高尙な佛の境なる悟りの境界は、我々如何にして味はれるかと言ふと、即ち「一切衆生悉有佛性」で、佛の方に此の廣大な味ひを、是非とも一切衆生に味はせなければならぬ、是非とも有りと有る者に此の惠みを頂かせなければ措かぬといふ、佛の廣大な慈悲より來た處の、佛の本願佛の名號、佛の光明がある。此の大悲の惠みの固りなる、佛の本願、名號、光明、眞に之こそ最後の大涅槃の醍醐の妙藥であると仰せ下されたのてある。故に此の妙藥、即ち眞に佛の惠み、本願を頂けば救はれぬ者は一人も無い。如何に惡い者、如何に罪惡な者、如何に煩惱熾盛の衆生でも、皆な其の罪を懺悔し迷をひるがへし、大悲骨髓に徹入するに到るのてある。其の遣る瀨無きお慈悲極まる醍醐のお惠みを頂けば、我々今迄罪が深いと思はなんだ者が、此のお惠みにより初めて、眞に我は罪の深い者てある、申樣無き惡人てある、此の罪深き惡人の我なればこそ、佛は斯く出現下され、言はうやう無き御苦勞を御懸け致し、遣る瀨無き思ひを起さしめ奉り、待ち兼ぬるとの廣大の御惠みてあると頂かせ貰ふ。すると佛の廣大の惠みの起つて下されたのは人の爲めて無い、全く此

の罪深き自分一人の爲めであると頂かせ貰へたのが、之が本願醍醐の妙藥を頂かせ貰うた味ひである。夫故「醍醐と言ふは佛性に喩ふ」てある。即ち醍醐は一切衆生悉有佛性の佛性の事である。此の文を一般に讀む時は、一切の衆生皆な佛性がある故に、誰でも皆佛に成れると取るのであるが、他力の味ひていふとそうては無い。『涅槃經』の中には

佛性をば大信心と名く。（中略）一切衆生は畢定して當に大信心を得べきが故に、是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり。大信心は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ如來なり。

との御言葉がありて、人の佛に成れる性といふは、我々の心に佛の廣大な惠みを頂いて起さしめられる處の信心が即ち佛性てある。故に他力の敎ては信心佛性といふ事を言ふのてある。自力聖道門ては人間は皆な佛性がある故佛に成れると言ふのてあるけれども、他力の上ては一切の衆生は皆な此の大信心を得られるが故に、即ち一切衆生は悉有佛性てあると申すのてある。又同じ經の中には

一切衆生は畢定して當に大慈大悲を得べきが故に、是の故に說て一切衆生悉有佛性と言ふなり。云々。

といふ御言葉もあつて、一切の衆生、凡そ生きとし生ける者は、佛の廣大の惠み、廣大の情けを受けられぬ者は一人も無い。其の遣る瀨無き廣大の御惠みと頂く一念に我々の心に廣大の大悲が頂かせて貰へるのてある。其の一念が即ち一切衆生悉有佛性てあると、斯くの如き御言葉もあるのてある。一應言ふと先づ斯うてあります。

處て近頃は段々細かく話させて貰ふのてありますが、今此の味は何處から頂かせて貰ふたらよいか。私共實際生活に於て、私自身が罪深く惱み多く、自分の力ては何うしても善く成る事が出來ず、現に斯く惱み苦みて居るのてある。又一面からは飽迄自分を善しと思ひて暮して居る私てある。其の私を如來大悲の親心ては、其の罪を罪とも知らず、人生總て當てにならぬものを當てにして暮して居る有樣を哀れと思召し、眞に其の者を救はんと、如來の方より廣大の親ありと示して、其の者を飽迄見捨てぬとある廣大の御惠みてある。今日迄自分の惡に惱み、自分のやうな者は仕て見やうが無いと歎き、自分の如き罪深き者は仕方が無いと悲しんて居る私を、眞に同情の涙を以て眺め、其の私の惱み苦しんて居る點に廣大の大悲を以て御覽下さる。此の廣大のお慈悲に遇ひぬれば、何人も此の惠みの爲めに心中より心開け、此の廣大の慈悲に安心せずには居られぬのてある。又自分は善い者てある、之ても立派な者だと思ふて居ても、如來の遣る瀨無き大悲の御心を頂くと、今日迄自分に善い所があるなどゝ思つて居たは、斯く迄に自分の爲めに心を惱まして居て下さる佛まします事を知らなんだからて、斯く彌々頂かせて貰ふと、成る程自分が善い段ては無く、彌々「地獄は一定すみかぞかし」と氣がつかせて貰へるのてある。斯く人生の凡てが惠みに入らせて貰はねばならぬように進んて居るのが今日の有樣てある。

其處て話が前に歸りて、佛說法の中て『涅槃經』は如何なる御經てあるか。際立てゝ言うと、『涅槃經』は實際問題に突き當つて佛の廣大な大悲をお示し下された御經てある。佛說法の最後なる『涅槃經』の說法に於て、大逆の提婆阿闍世が現在に顯はれ、現に佛に對し、又父母に對し惡逆極まる事をした。阿闍世王の父頻婆娑羅王の如き、佛成道の時より久しく佛を供養し、又母韋提希夫人も長らく佛の說法を聽聞した人てあるけれども、斯くの如き大逆無道の子供が現はれた爲め、彌々人生の最後に突き當り、大煩悶に陷つた。斯の如き時に至りて初めて佛もお說き下され、又然ういふ惡逆極はまれる機に初めて頂かせ貰はれたのが、此の本願醍醐の妙藥てある。故に度々私は言ふ事てあるが、眞實の淨土他力の敎は、『涅槃經』說法の時に至りて初めて、眞に佛の廣大の惠みが頂かれることになつたのてある。猶ほ際立てゝ言ふならば、如來の本願を如何に言葉に聞き、如何に『大經』て法藏菩薩の四十八願を頂くも、唯、よそに眺めて居る丈けては分らぬが『觀經』（即ち『涅槃經』と同時の經）に至つて、初めて事實に斯くの如き大逆人が顯はれ、一世が苦みに陷り、茲に初めて一代說法の生粹なる醍醐本願の妙藥を、其の惡逆の者が頂いた。此の時に初めて佛の廣大なるお惠みが、事實に現はれて下されたのてある。故に眞に人生の實驗として我々の心中に大悲の惠みを頂かせて貰ふ其の實驗の源は、實に此の『涅槃經』の最後の說法の時に在るのてある。天台風に言ふ時は、此の『涅槃經』の說法を『法華經』を肝心とする故、『法華經』を醍醐といふのてあるけれども、親鸞聖人より頂く時は此の『涅槃經』が外ては無い、要するに如來の本願をお示し下されたのてある。其の證據には『觀經』に明かにある如く、釋尊が韋提希夫人の爲めに如來の本願をお說き下さると、希提希夫人は苦しみ中より安心し、又『涅槃經』に在る如く、阿闍世王の如き大逆人が、如來の惠みを聞いて安心したのてある。之が即ち本願醍醐の妙藥てあると、斯くの如き御示してある。

二

其處て常に言ふ事てはありますけれど、此頃殊に著しく感じて居る事故話しますと、御存知の如く佛四十餘年の御說法が印度の國中に行き渡り、彌々涅槃に入り給はんとする時に當つて、提婆の如き惡弟子が現はれ、佛の敎團を破壞し自ら佛に代らんとした。又佛に歸依して居られる頻婆娑羅王の太子阿闍世をそゝかし、阿闍世は父王を殺し、自ら親に代らんと企てた。實に佛の敎團にも、國の政治の上にも今迄に無き大逆惡が起り、現前に五逆十惡誹謗正法の大惡人が現はれて來たのてある。之れが彌々佛の說法の眞の光の現はれて下さる可き時到りたのてある。從來は多くの御弟子達が種々說法を聞いて居られたが、是程の惡逆人は顯はれなんだ。彌々御說法の最後といふに至りて斯くの如き大變亂がもち上つたのてある。斯の如き惡逆の大罪人が何によりて救はれるか。何によりて之等の惡人が助るか。又頻婆娑羅、韋提希夫人等の之等の人達が、何によりて眞の光を持ち來すか。即ち本願醍醐の妙藥が彌々現はれて下されねばならぬ時が到つたのてある。即ち『觀經』を拜讀すれば分る如く、阿闍世が自分の父頻婆娑羅王を獄に入れ食を奉らぬ故、母韋提希夫人が之を送られた。すると阿闍世王は非常に腹を立て

我が母は是れ賊なり、賊と伴たり。沙門は惡人なり。幻惑

呪術を以て此の惡王をして多日死せざらしむ

と、佛が目連及富樓那を遣はして、獄中頻婆娑羅王の爲め法を說いてお出になるに係はらず、劒を執つて母を殺さんとして、耆婆の爲め支えられ遂に母を獄中に幽閉した。其處で韋提希は獄中に幽閉せられて如何に在るかといふに『觀經』には、

時に韋提希幽閉せられ已りて、愁憂憔悴す、遙かに耆闍崛山に向ひて、佛の爲めに禮を作して是の言を作く、如來世尊、在昔の時恒に阿難を遣はし來らしめて我を慰問したまひき。我今愁憂す。世尊は威重にして見たてまつるを得るに由なし。願はくは目連と、尊者阿難とを遣はして、我與めに相見せしめたまへと。是の語を作し已て悲泣雨涙し、遙に佛に向つて禮したてまつる。

と。之は『觀經』には無きも頻婆娑羅王は初め佛出家求法の時自分の國の全部を與へるから出家の志を翻して國に歸れと言はれた人である。そして佛より自分の求むる所は此の世の國土て無い、自分は弘く一切衆生の爲めに佛陀の位を求めるのであると聞いて、然らば戚道の上は第一に來りて、此の我が心を救ひ給へと願はれた程の頻婆娑羅王である。夫故佛は常に頻婆娑羅の歸依を受け、佛四十餘年の說法は頻婆娑羅王も韋提希夫人も常に聽聞して居られた。其の頻婆娑羅王及韋提希が最後に遂に斯くの如き不幸な事になつたのである。韋提希夫人の如きは我が子阿闍世の爲めに斯く苦しめられて、何とも仕樣が無い。即ち今の如く『我今愁憂す、……我がために相見せしめ給へ』と悲泣雨涙して願はれたのである。すると佛は韋提希夫人が未だ頭を擧けざる間に、韋提希の心を知し召して、阿難目連を連れて相好著しく、獄中に現はれ給ひた。韋提希ははや既に佛が眼前に現はれ下されたを見て大に驚き、身に着くる瓔珞を絶ち、五體を地に投げて號泣して申さるゝには、

世尊、我宿何の罪ありてか此の惡子を生じ、世尊復何等の因緣ありてか提婆達多と共に眷屬たる。唯願はくば世尊。我が爲めに廣く憂惱無き處を說きたまへ。我當に往生すべし。閻浮提の濁惡世をば願はず。此の濁惡の所には地獄餓鬼畜生盈滿して、不善の聚多し。願くば我未來に惡聲を聞かず、惡人を見じ。今世尊に向つて五體を地に投て求哀懺悔す。唯願くば佛日我に淸淨の業處を觀ぜしめたまへ。

と。即ち人生には一つも賴みになるものは無い、何うか眞實の佛のお淨土を敎へ給へと願はれたのである。其處で之より『觀經』の御說法が初まるのであるが、今茲では其の要點丈け申してもよいのであるけれども、茲に一つ信仰を求むる人に取りて、言うに言へぬ盡きぬ味がある故、も少し申すならば、其の時に佛は何うかと言ふに、眉間より光を放ち給ふに、十方諸佛の淨妙の國土其の中に現じ歷々見えたとある。之は信仰無き人より見ればをかしいと言はるゝかも知れぬも、佛力計る可らず、佛のお力により韋提希をして見せしめられたのである。處が韋提希は其の十方諸佛の國土を見畢りて、佛に何と申されたかといふに、

時に韋提希、佛に白して言さく、世尊是の諸の佛土また淸淨にして皆光明有りと雖も、我今極樂世界の阿彌陀佛の所

に生れんと樂ふ。唯願はくば世界、我に思惟を敎へたまへ、我に正受を敎へたまへ。

とある。即ち十方諸佛の國土皆な立派ではあるが我は極樂世界の阿彌陀佛のみ許に生れ度い、願はくば我に思惟と正受とを敎へ給へ、とお願ひせられたのである。茲に言へぬ味があるのである。

先づ初めに『觀經』といふ御經が意味甚深な御經で、阿彌陀佛の極樂淨土の樣を面の當り眼に觀る經故、即ち『觀無量壽經』である。即ち此の少し後の所で、韋提希夫人が、「我が如きは佛力を以ての故に、彼の國土を見奉るのであるが、未來世の衆生は五苦に逼められて、見る事が出來ぬ、何うか未來世の衆生の爲めに、觀る法を承はり度い」との願ひの下に、日想觀水想觀乃至進んで阿彌陀佛の極樂の樣や、觀音勢至を觀奉るの法をお說き下されたが、『觀經』の御說法である。而して其の阿彌陀佛の身相光明をお說き下さる所に、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の御言葉があるのである。で『觀經』は要するに、極樂世界の樣を眼前に觀る經、即ち見やうによりては、觀法をお說き下された經なのである。處が親鸞聖人は、否親鸞聖人のみならず善導大師より法然聖人に渡り、親鸞聖人に至りて夫れが著しくなつたのであるが、此の淨土の敎は『觀經』がもとになつて居るのである。善導大師が支那で念佛を勸められたも此の『觀經』によつてであり、又法然聖人が長々苦しんで最後に念佛をお頂きなされたも、此の善導大師の『觀經』の御釋をお覽なされてゞある。我々も自分が眞に病にかゝつて居る事に氣が付かねば、藥の眞の難有味は分らぬ。處で『觀經』は今言ふ如く、觀法によつて極樂淨土や阿彌陀佛を面の當り觀せて頂く經であるが、親鸞聖人は之を『觀經』の上て仰しやらぬ。聖人は何とお頂きなされたかといふに、眼に佛の姿や、極樂淨土の樣を見るが『觀經』の主眼ては無い。眞の眼目は何處かといへば、「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」

此の光明を頂き南無阿彌陀佛と稱ふる一念に、佛の光明中に攝取せられて捨て給はぬ、此の佛の光明を頂き、念佛を信じ、攝取不捨の利益を蒙る、茲が『觀經』の肝腎である、姿や何かを觀せて下さるは、即ち茲に到らせて下さる手引きである、韋提希夫人が淨土を見せて頂かれたも、見せて貰はれた其事自身が主眼では無い、其の見せて貰はれた事で信を起し、有難いと惠みを頂かれた處が肝腎である、要するに觀法は御手引き、眼目は眞のお惠みを頂く、此の一つであると、之が親鸞聖人が『觀經』をおいたゞきなされた御頂き方であります。で一時信仰界に實驗の聲が喧ましかつた時、多くの人は自分もそんな實驗を仕て見度い、正しく光に遇ふて見度い、正しく佛を見て見度い、心がほがらかになりて見度いと、自分がさうなり度い〳〵の心が先きになりて、肝心のお慈悲を頂く方は第二になり、最後には見佛見神などの言葉が起つて來た事がある。之は何れかといふと、其の實驗したと言はれた人の方は、自分の力で實驗したのては無くて、自分の心に廣大の手引きにより惠みを頂かれた其の儘を言はれたのであつたけれども、横より見る時は何か特殊な事が有るやうに思はれ、自分もそうなり度い〳〵といふ、心が先きになり、却つて手引きの方が主になつて仕舞うたのである。要するに信心

の一道に於ては、唯佛の眞の御惠み一つを頂く、此の他にものは無いのである。

其處で前に反りて親鸞聖人は、先きの韋提希夫人の思惟と正受といふ言葉を二つにお分け下されて、『化身土卷』の中には

我に思惟を敎へたまへといふは、即ち方便なり。心に思惟し觀念して、眼に佛の姿を拜まうとするは、即ち方便であつて、未だ佛の眞の思し召しては無い。又

我に正受を敎へたまへと言ふは、即ち金剛の眞心なり。

とお示し下されてあるのである。之が實に有難いのである。一寸話が横に入るけれども「我に思惟を敎へたまへ我に正受を敎へたまへ」とある此の思惟と正受に氣を就けさせて貰はねばならぬ。我々信心を頂くに、此方から思惟して掛つては駄目なのである。何うか信心を獲度い、何うかして喜び度い、何うすれば喜べるだらう、何うかしたら頂けんか知らん、自分は罪が深くて仕方が無い、自分のやうな者は、何うしたら頂けるのか知らん、などゝ、此方から思惟してかゝつては即ち自力である。茲が非常に味の深い所である。と言ふものは、他力の信は此方から幾ら思惟したつて頂けぬ。或は冥想的に思惟し、或は安心問題として種々思惟する。皆な何にもならぬのである。爾らば何んにもならぬから、何うすればよいか。即ち正受で、正しく向ふからの御惠みを受けるのである。之が即ち金剛の眞心なのである。此の思惟と正受と二つにお分け下された所が、親鸞聖人の御眼の鋭い所である。

併し之も此方から受けんならぬと思うては受けられぬのであるが、之に就き近頃私の喜ばせて貰ふ事は、我々の思惟が斯く間に合はぬ爲めに、茲に受ける可き佛の五劫の思惟が居て下さる事を氣を附けさせて貰はねばならぬのである。此の佛の廣大なる思惟がましますに、我々此方で彼是れ思惟するは、實は佛の思惟を愚にして居るのである。人が此方の借金を引き受けると言ふ。然るに自分には、こんなに澤山の借金があるからと、此方の言ひ前計り並べて居るのは、實は向ふの力を信じぬからである。然るに向うでは、君は何を言つてるのか、君の言ふ位の事を此方で知らぬと思うて居るか、此方は君の苦しんで居る底の底迄知り拔いて心配して居るのであると、此方の心配苦勞位の事は親の方では皆分つてある。分つて居ればこそ其の罪深き者を救はんとの廣大の大悲より、五劫思惟の願をお建て下されてあるのである。此の廣大の思召の程が分り、成る程五劫思惟の本願は、此方が其の罪惡深重の者なる故、佛の方にて此方の性分の底の底迄お見拔き下され、其上より廣大の大悲で向つて下さる佛であると頂かれゝば、入らざる考するには及ばぬのである。

猶ほも少し言ふならば、全體私共「彌陀の五劫思惟の願を案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」とは、度々『歎異鈔』で頂いて居ながら、其の五劫思惟の御苦勞は、眞に私の爲めの御苦勞である、眞に親鸞一人が爲めである、といふ丈けには何うも喜び爲されぬのである。之は疎かに思ふて居ては實に勿體無い。我々が此方の思惟も思案も絶え果てゝ、眞に佛智の御不思議と頂かせ貰ふことの出來るのは、此の五劫思惟のあればこそ、此方で心配す可き事を向うで心配し盡して置いて下されてあればこそである。我々が御馳走を一口に頂戴することの出來るのは、既に料理の方に充分の心配が仕てあればこそ、ハイと其の儘頂くことが出來るのである。ハイと頂けるは、頂けるやうに向うの方に充分の心配がしてあるからで、此方が上手の故では無い。茲になると禪の大悟とは他力の信は趣きが違ふので、我々が御慈悲に心開けるは、御慈悲の手前で開けねばならぬ丈けの譯が籠つてあり、有難くなるは、有難くなる可きものを、向ふから差向けて下さるからである。茲に至りて法然聖人の選擇本願念佛の御敎化が有難い。阿彌陀佛が法藏菩薩の昔、澤山なる諸佛淨土の中より往生の行をお選び下された時、此の罪惡の私を助けんとの廣大の思召てあるから、我々には出來ぬ諸佛菩薩の戒行や修行や乃至六度萬行は皆な擇び捨て、十方衆生如何なる罪惡の者も、女人も小供も皆な共に稱へられる南無阿彌陀佛一つを御選び下された。此の南無阿彌陀佛の名號ならば、如何なる罪惡でも、如何なる惡人でも口にする事が出來る。之ならば如何なる者も稱へられると、初めから此方の心の底迄知り拔いた上での御苦勞である。之が阿彌陀佛の五劫思惟の御苦勞である。佛は是程迄に五劫の思惟で我々の身の上をお見拔き下され、其の罪惡の者を助けると長々御苦勞下され、阿彌陀佛と姿を顯はし、十劫以來待つて居て下されてある。此の五劫思惟の御本願、遣る瀨無き佛のお慈悲であると頂く上は、此方より佛を彼れ是れと思惟する餘地は無い。其の遣る瀨無き佛の御思惟を、其の儘此の身に頂いて、其の御恩德を喜ばせて貰ふばりである。之が信心の味びである。

三

さて斯く韋提希が「我に思惟を敎へたまへ、我に正受を敎へたまへ」と願はれると、

爾の時世尊即便微笑したまふに、五色の光有つて佛の口より出づ。一々の光頻婆娑羅の頂を照らしたまふ。爾の時大王幽閉に在りと雖も、心眼障り無くして、遙に世尊を見たてまつりて、頭面に禮を作すに、自然に增進して阿那含を得たり。

其時初めて世尊は微笑し給ひ、口より五色の光を出し給ふに、其の光頻婆娑羅王の頂を照し、王は阿那含の悟を得たといふのである。其の時佛韋提希に仰せられるには、

爾の時世尊、韋提希に告げたまはく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に繫念して、諦に彼の國の淨業成じたまへるひとを觀すべし。云々。

實に此の一句が親鸞聖人より言ふと、『觀經』の肝腎かなめなのである。何も水想觀や日想觀を爲し、極樂の珊瑚の樹や、瑠璃の地面を思惟する事が、佛の御惠みを信じたのでも頂いたのでも無い。「汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去ること遠からず」――今汝韋提希は、獄中で苦しいと惱んで居るのであるが、佛の眞の御惠みは今汝がそうやつて苦しんで居る其處に居て下さるのであるぞ、汝はまだ夫れに氣が附かぬか。「汝當に念を繫けて、諦に彼の國の淨業成し給へるひとを觀ずべし。」――彼の國の淨業成し給へるひとゝは、斯く我々が爲に長々御苦勞下されて、遂に本願御成就下され、十劫以來待ち

兼ねて〻下さる阿彌陀佛の惠みを頂けよと、御知らせ下されたのである。親鸞聖人は之を『化身土卷』には、「諦かに彼の國の淨業成じたまへるひとを觀ずべしとは、本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしと也」と御示し下された。玆の『化身土卷』の御文は、今少し前後を拜讀すると有難いから、重復になりますけれども拜讀します。

釋家の意に依つて、無量壽佛經觀を按ずれば、顯彰隱密の義有り。(中略)彰と言ふは如來の弘願を彰はし、利他通入の一心を演暢す。達多闍世の惡逆に緣つて、釋迦微笑の素懷を彰はし、韋提別選の正意に因つて彌陀大悲の本願を開闡す。斯れ乃ち經の隱彰の義也。

韋提別選の正意とは、即ち先きに澤山ある諸佛淨土の中より、韋提希夫人が阿彌陀佛の極樂淨土を選み出した事である。夫れが阿彌陀佛の御心が韋提希に屆いたからであつて、韋提希自身が思ひ附きては無い。阿彌陀佛の今日我々惡人の爲めといふ、其の遣る願無き御心が、韋提をして選ばしめ下されたのである。故に「韋提別選の正意に因つて、彌陀大悲の本願を開闡す」である。猶ほ續けて、

是を以て經に、我に淸淨の業處を觀せしめたまへと言へり。淸淨の業處と言ふは、則ち是れ大願成就の報土なり。我に思惟を敎へたまへと言ふは、即ち方便なり。我に正受を敎へたまへと言ふは、即ち金剛の眞心なり。諦に彼の國の淨業成じたまへるひとを觀すべしと言ふは、大願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしとなり。廣く衆の譬を說かんと言ふは、則ち十三觀是なり。汝是れ凡夫、心想羸劣にしてと言ふは、則ち是れ惡人往生の機たることを彰す。云云。

實に氣持よき迄『觀經』の切りわけをつけて置いて下さるのである。さて斯く段々頂き來ると、要するに『觀經』といふ御經は、此の廣大の惠みを承はり、南無阿彌陀佛と一念名號を頂き稱ふる者を、攝取不捨の光明中に攝め取つて下さる、といふ事を御知らせ下された御經といふ事になるのである。其處で韋提希夫人は最後に至り、此の御說法を聽聞して廓然大悟として無生法忍を得られた。即ち「阿彌陀佛此を去ること遠からず」の遣る瀨無き御敎化が、韋提希夫人の心に徹底したのである。親鸞聖人は之を『正信偈』には、

善導獨り佛の正意を明かにせり。定散と逆惡とを矜哀して、光明名號因緣を顯はす。本願の大智海に開入すれば、行者正しく金剛心を受けしむ。慶喜一念相應の後、韋提と等しく三忍を獲、即ち法性の常樂を證せしむといへり。

と御示し下された。即ち『觀經』は佛の遣る願無き光明名號の御惠を御知らせ下され、此の光明名號の因緣により一念本願を頂いた者は、韋提と等しく三忍を獲させて貰ふのぢやぞと御知らせ下された經なのである。夫故又斯の經の畢りには

若し念佛する者は、當に知るべし、此人は是れ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩其の勝友と爲りたまふ。

とありて、此の南無阿彌陀佛を頂いた者は佛の勝友なりと御賞め下され、又

佛阿難に告げたまはく、汝好く是の語を持て。是の語を持てとは、即ち無量壽佛の名を持てとなり。

との御言葉もあるのである。要するに『觀經』一部は佛の最後

に及んで彌陀の本願念佛の廣大なるお力を事實の上に、知らせて下されたに外ならぬのである。

さて次には阿闍世王である。實は今日は主として阿闍世を話す積りの處、韋提希夫人の方が長くなつたのでありますが、斯く不孝なる阿闍世王太子の爲めに、韋提希夫人は獄中に苦しみ、頻婆娑羅王は獄中で死んでしまはれた。其阿闍世王は度々言ふ如く、『涅槃經』で頂くと、其後深く自己の罪惡を悔ひ、身體に悔熱を發して、非常に苦しみ惱み、悶絕した。其處へ幸ひ耆婆が現はれ勸めた爲め、遂に佛の御許に詣うで、佛の仰せを聞く事となり、其の時忽然空中に聲在りて阿闍世王に告げて言ふには「汝早く耆婆が言に聞き、佛のみ許に行け、他の者の言に聞く事勿れ」と。阿闍世王其の聲を聞き誰かと問ひ反へせば、「吾れは是れ汝が父頻婆娑羅なり」との答へであつた。此の言をきゝ阿闍世王は大に驚き、遂に佛のみ許に行き聞くことゝなつたのである。『涅槃經』には其處の所に名高い

我阿闍世王の爲めに涅槃に入らず。

といふ御文がある。私は此の間上州安中の涅槃會に參つて來ました。此の涅槃會には私は何處てゝも言ふのでありますが、丁度此の時が佛扨提河畔で將さに涅槃に入り給はんとする時であつた。其の矢先きに此の王舍城の大騷動が起つたのである。御存知の如く、佛が此の涅槃に入り給はんとする時に、諸の弟子達は泣いて佛が此の世に止まり給はんことを願はれた。けれども、佛は一つも聞き入れ給はなかつた。其の佛が最後に今の如く「我阿闍世王の爲めに涅槃に入らず」と仰せられたのである。之が實に有難い處なのである。彼れ阿闍世王は親に敵對し、佛に背き、實に言はうやうなき大逆人である。其の大逆人が居る爲めに、我は之を救ふ爲め何うしても涅槃に入れぬと仰せ下されたのである。又之を大乘的に頂くならば、佛は他の爲めて無い、唯一人の阿闍世王を助ける爲め、未來永劫永久に此の世に居るぞとお示し下されたのである。其の阿闍世王の爲め未來永劫此の世に居て下さるとは、「阿闍世とは普く一切の五逆を作る者に及す」て、玆に阿闍世とお示し下されたは、即ち今日我等の事をお指し下されたのである。即ち今日の我々は皆な阿闍世王である。其の我等阿闍世の爲めに、涅槃に入れぬと仰せ下されたのである。實に玆が『涅槃經』に最後の醍醐味たる阿彌陀佛本願の御正意が現はれて下された所、佛四十餘年の御說法は阿闍世王の逆惡によりて、玆に初めて其の御眞意たる逆惡攝取の大德音が現はれ下されたのである。

さて阿闍世王が佛の處に行き、昔を悔み罪を歎くと、佛は言を盡くして種々にお述べ下された。「汝に若し罪が有るならば佛にも又罪がある。何ぜならば汝が父頻婆娑羅王は諸佛に供養して善根を種へ王位を得たのである。佛若し供養を受けなんだら、汝が父も王となる事無く、從つて汝も父を害する事は無つたであらう。すればもと〳〵供養を受けた佛にも罪がある。」と、種々に言葉を極めてお說き下された。此の仰せを聞き阿闍世王心中大歡喜を生じ、

世尊我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず。伊蘭より栴檀樹を生ずる者を見ず。我今始めて伊蘭子より栴檀樹を

生ずるを見る。伊蘭子とは我が身是れ也。栴檀樹とは即ち是れ我が心無根の信なり。無根とは我初より如來を恭敬することを知らず、法僧を信ぜず。是を無根と名く。

と、今迄佛を供養する事を知らず、法僧を尊む事を知らず、身の罪過に責められて悶絶する處へ、遣る瀬無き佛の大悲を承はり思ひがけ無く大歡喜を得た事を喜ばれたのである。之より先き阿闍世苦悶の極に達し、地に跣れて苦しんで居る時、佛之を知し召し月愛三昧に入り、大光明を以て之を照らし給ふに、阿闍世王の身の惱み忽ち快くなり蘇み反つた。此の時耆婆は、佛の大悲先づ王の身を治し、後ち心に及ぼし給ふのであると、阿闍世王をすゝめ、王は耆婆に身を托して佛に詣うでたのである。實に是れこそ、如來大悲の醍醐の妙藥である。斯くの如くして阿闍世王は此の如來大悲の遣る瀬無きお惠みにより大安心し、今迄地獄に墮ちると苦しんで居た者が、「今斯く我が罪を滅し給ふ佛の御力は、即ち未來の一切苦惱の衆生を救はんとのお力である、我れ是の爲めにならば、無量劫中阿鼻地獄に墮して、無量の苦みを受くるも以て苦とせぬ」と、遂に歴史上に表はれてある如き、佛法興隆の第一人者たる名高き阿闍世王とはなられたのである。此の時諸の佛弟子、偈を以て佛を讃歎し奉りたる一句に、

如來一切の爲めに、常に慈父母と作りたまふ。當に知るべし諸の衆生は、皆な是れ如來の子なり。世尊大慈悲、衆の爲めに苦行を修したまふ。人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し。

遣る瀬なき如來のお心は、一切衆生の爲めに常に慈父母となり下され、斯くの如く種々に苦勞して、我等衆生に惠みを知らせて下さる事は、恰も人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如くである、との御文である。

さて親鸞聖人は、以上の『觀經』及『涅槃經』に於ける御説法を御覽になり、實に佛陀大悲の惠みの來る大もとは茲である、他力の味ひは茲に在るとお喜びなされ、即ち『敎行信證』の劈頭の序文に於て

竊に以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。然れば卽ち淨邦緣熟して、調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機あらはれて、釋迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。是れ卽ち權化の仁、齋しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を惠まんとおぼしてなり。

とお示し下された。段々頂くに、廣大の佛陀大悲の惠みは、斯くの如き大逆の現にあらはるゝ今日に於て、彌々顯はれ下さるのである。斯くの如き大逆人の阿闍世王が眞に安住したる佛の惠みは、斯る今日の時代に於て增々明かになつて下さるのである。『和讃』に宣はく

彌陀釋迦方便して、　阿難目連富樓那韋提、
逢多闍王頻婆娑羅、　耆婆月光行雨等、
大聖おの〳〵もろともに、　凡愚底下のつみひとを、
逆惡もらさぬ誓願に、　方便引入せしめけり。

凡て皆な我等底下の凡愚を引入の御方便である。以上本願は瀰の妙藥を正に萬人の頂戴すべき時機到れりと思ひ、今日は此のお話を致したのであります。（二月二十六日）

雜　錄

親鸞聖人の傳道

親鸞聖人の事に就ては、平素深く聖人を敬慕し、その信仰は勿論、御傳記に就てもいろ〳〵に味ふて居るので、味へば味ふ程益々聖人の偉大なるに驚くのである。言はゞ聖人の事に就て筆を取り、若しくは御傳記を述べやうとする時などは、益々恐を抱いて控目にする傾があるのである。で、今「親鸞聖人の傳道」といふ題に對しても、大膽に聖人傳道の精神に就ても實に述べ難いのである。けれど各自に味はして頂いてゐる所感であるから、私は私の味はして頂いてゐる點に付いて御話して見たいと思ふ。

そこで、先づ第一に聖人の傳道といふことを味はうとするに就ては、溯りて聖人の求道に大に注意せねばならぬと思ふ。之は念の爲め一言せねばならぬのであるが、全體傳道といふ文字を用ふれば、忽ち人が他に對して布敎することを目に付けて、傳道なるものは、即ち自己が求道して獲た所のものを、他の求道者に傳へるのであるといふ神精を忘れ易いのである。今日の宗敎者が、徒に傳道にのみ目を付けて、自分自身の信仰を求むることを疎にするが如き傾向があるのは、甚だ遺憾に堪へぬことである。私が西洋から歸朝した時に、先輩の方々から、傳道學校を創立したらばどうかといふお勸があつた。然るに私は思ふに、傳道といふ名を揚げれば、必ず世の傳道せんと欲する人々ばかり集り來ることを豫想致したから、之を思ひ止まつた。私は寧ろ世の傳道せんと欲する者よりも、道を求めんと欲する人に、自分の求め獲たる所を傳へんといふ意で、遂に「求道」なる名を掲げた次第である。果して大に訪ね來る人、皆信仰を求むる人のみであつて、然も是等の人々が、其安心を獲たる結果を人々に傳へてくれることは、明なる事實である。であるから、すべて傳道なるものは、畢竟自己の求道し獲たる結果を、他の求道者に對して傳へる意であることを忘れてはならぬのである。

今親鸞聖人の傳道といふも、聖人が求道して獲給ひたる結果を、人に傳へられたものであるから、傳道の方法といふものは別になかつたのである。唯、自身の獲たるがまゝを、緣に從うてお傳へになつたばかりである。そこで聖人の求道と傳道との間に就て、二者同一なることは、之を事實の上に、傳記の上に見ることが出來る。然してその傳道に就て、先づ年を以ていへば、三十五歲御流罪の時を以て初めとして、九十歲御入寂の時に至るまで傳道ならざるはないのである。されど時期を劃して言へば、越後御流罪を以て第一期となし、東國御敎化を以て第二期とし、御歸洛後を以て第三期とするならば、此三期の中に於て最も中心時代と認むべきは、第二期稻田御住居時代であつて、實に眞宗開闡の時を其焦點と見ることが出來る。して見れば、聖人の傳道は『御傳鈔』下卷第二段に示されたる

聖人、越後の國より常陸國に越て、笠間郡稻田郷といふとこ

ろに隱居したまふ。幽栖を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉づといへども貴賤衢に溢る。佛法弘通の本懷こゝに成就し、衆生判益の宿念たちまちに滿足す。この時聖人おほせられてのたまはく、救世菩薩の告命をうけし、いにしへのゆめ、すでにいまと符合せりと。

が之てある。全體覺如上人の『御傳鈔』は筆致頗る簡潔てあつて、事實は頗る少いけれど、之を味へば、實に言ふべからざる無限の宗教的感趣を以てみたされたるものがある。現に此第二章の如き、聖人東國に於ける傳道の趣がよく現はれてゐるのである。先づ他はしばらくをき、「この時、聖人おほせられてのたまはく、救世菩薩の告命をうけし、いにしへのゆめ、すでにいまと符合せり」とあるを見ても、僅に一點の墨痕であるが、此中に確に聖人の求道時代に於ける事實を顯すものがある。即ち『御傳鈔』上卷第三段に於ける、六角堂夢想の條下の事實である。此六角堂夢想の靈語の事實は、高田傳にては建仁元年聖人二十九歳、吉水入室の時の百日參籠の滿願たる最後の日といふことになつてある。けれど普通、『御傳鈔』には建仁三年とあつて實は建仁元年辛酉と書いてある。此點は頗る混雜があつて疑はしいけれど、或は吉水入室の時とは別にして、元年以後別に此靈語があつたと見るも差閊はなからう。何れにもせよ此靈語は、聖人の一代を通じて著しき影響を有したことはいふまでもないことで、即六角堂を建立し給ひし聖德太子即救世菩薩の垂迹、聖德太子の化儀を實現して家庭的の信仰生活を初め給ひたる源である。之は少し深入りに渡るやうであるが、聖御太子の化儀といふことに就て、一歩進んで話さうと思ふが、全體親鸞聖人が、十九歳の時に磯長の御廟に參詣せられた時に、六句の靈語を得られたことを傳へてゐる。其初めに

我三尊化塵沙界　日域大乘相應地
諦聽諦聽我敎令　汝命根應十餘歳
命終速入淸淨土　着信善信眞菩薩

とある。抑此、我三尊化塵沙界、日域大乘相應地といふことが、之即聖德太子の化儀を敎ふるものである。如何となれば、其磯長の廟の廟窟内に刻せられてある二十句の偈なるものがある。其中に

大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子
是故方便從西方　誕生片州興正法
我身救世觀世音　定慧契女大勢至
生育我身大悲母　西方敎主彌陀尊
眞實眞如本一體　一體現三同一身
日域化緣今已盡　還歸西方我淨土
爲度末世諸衆生　父母所生骨肉身
還留勝地此廟艦　三骨一廟三尊位
過去七佛法輪所　日域大乘功德地
一度參詣離惡趣　決定往生極樂界

とある。之は一應事實をいへば、聖德太子が觀世音の垂迹たることはいふまでもなく、膳妃は大勢至であり、母后の間人の皇后は彌陀尊である。此お三方が眞實眞如の境界より顯はれ來りて、一身同體の家庭を形ち造り給ひしが、之れ大乘佛法の精神を人生の上に實現せられたるもので、日域大乘相應地

といはるゝ所以である。そこで此磯長の廟窟内の二十句の偈を、親鸞聖人御自身が書き留かれたか否やに就きて取調べて見るに、疑ふべからざる直筆が遺つてゐる。即聖人八十三歳の時製作せられたる『皇太子聖德奉讃』といふ和讃がある。其奥書に此二十句の偈が書いてある。但し、現今御直筆は、高田專修寺にある。然しをしいかな、專修寺のには奥書がない。然し坊間に行はるゝ版本には明に奥書がある。而して此本の御直筆の斷片が、諸所に散在するのを認めるのである。又、加賀金澤專光寺の什寶の、朝圓法眼の筆になつた聖德太子像がある。其添書として、二十句の偈の中、我身救世觀世音の四句を書かれたる聖人の御直筆がある。之を以て見るに確に二十句の偈に就きては深く御注目なされて、聖德太子の家庭に法り給ひしといふことが明に分かる。されど聖人が、之を實人生の上に實現さるゝやうになつたのは、遠く十九歳に時に得たまへる六句の偈に胚胎して、三十一歳の六角堂靈語によりて、之を事實に現はされたものである。而して六句の偈の命終速入淸淨土は、果して十餘歳後に法然聖人に面接し給ひし時、之を信仰的に實現せられた。『愚禿鈔』に所謂「信ニ受本願一前念命終、即得往生後念即生」とあるは、この意を述べさせられたのである。聖人、後に夢の告によりて、綽空の字を改めて善信と名けられたのも、畢竟此靈語の實現である。斯くて聖人が、法然聖人と相俟ちて、二菩薩の引導に順じて如來の本願を弘通し給ひしが眞宗である。斯くの如く、聖人御自身の求道の滿足せられた其まゝが聖人の傳道となつたのである。依て其當時の六角堂の靈夢に

爾時善信、夢の中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば峨々たる岳山あり。その高山に數千萬億の有情群集せりとみゆ。そのとき告命のごとく、此文のこゝろを、かの山にあつまれる有情に對して、說き聞かしめ畢とおぼえて、ゆめさめ畢云云

とある夢想其まゝが、稻田に於ての傳道に於て實現せられたのである。玆に一言注意のすべきは、すべて聖人の傳記に於ける夢想を、徒に言を神怪に托して、人生上に於ける活ける信念、活ける理想とともなはざるは、頗る遺憾に思ふことであるが、さればといつて、悉く又人生面より見て、其神秘的意味をも除き去らんとするが如きことは、又心もとなき業である。已に『御傳鈔』の文に明に顯はるゝ如く六角堂の靈語は、確に豫言的性質を有するものであつて、東國に於ける傳道は不知不識の間に聖德太子の方便引導たることは明である。されば、こそ、傳ふる所によれば、稻田に於ける本尊は聖德太子を以て本尊とし、左右には、九字、十字の名號をかけてあるといふ說がある。其正否は兎も角、かくの如く聖人の求道時代より、傳道時代を徹照すれば、實に御一代前後招應して、大なる意義ある御一生である。そこで稻田に於て說き給ひし御敎化も畢竟、御自身の斯くの如くして獲給ひし信心を人に傳へんとの、報謝的經營に外ならぬのである。而して、斯くの如き偉大なる聖人の御實驗は、即ち如來大慈大悲の本願の廻向によらせられたものである。其如來の本願を、我も信じ人にも敎へ、御同朋御同行として、東國の貴賤道俗に對し宣布し給ひたのである。實に夢想の如く「善信この誓願の旨趣

を宣説して、一切群生に説き聞かしむべし」といへる告命を、果して夢想の如く、峨々たる岳山たる東國の稲田に於て、數千萬億の有情にお説きされた有様が、所謂「幽栖を占といへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉づといへども貴賤衢に溢る」といふ所以である。聖人は「佛法弘通の本懐こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに滿足す」といはれたるは、當時に於ける聖人の宿望御滿足の聲である。

そこで先づ第一に大に注意すべきは、聖人が稲田に於てその實驗のまゝ、換言せば如來の本願力廻向の眞髄を、信仰の餘り書き聚められたものが、即ち眞宗の敎行證を敬信して、慶嘆の餘り聚められたるが『敎行信證文類』である。されば此『敎行信證』は、聖人の實驗の其まゝをお書きなされたことであることを、何人も忘れてはならぬのである。抑も『敎行信證』の初めに、

謹按二淨土眞宗一有二二種廻向一。一者往相、二者還相。

と書き出された。此二種の廻向といふことが、即ち聖人の求道時代に於て、聖德太子の引導によりて獲られたものである。てあるから、按ずるに往還二廻向は、聖德太子の手引によりて、法然聖人の選擇本願を聞きて、所謂廻向の信行を得、尙其信念より出で來る所の人生觀によりて、六角堂夢想の告命により聖德太子の化儀に法りて家庭生活の上に普賢の德を仰がれたる、之れ往還二廻向の眞精神である。而して之れは、いふまでもなく十九歳の告命と六角堂の靈語とによりて、聖人自ら味ひ給ひたる如來廻向の味である。さればこそ『皇太子聖德奉讃』を見るに

佛智不思議の誓願を、　聖德皇のめぐみにて、
正定聚に歸入して、　補處の彌勒のごとくなり。

とあるを初めとして、全體に渡りて其意味の明であることはいふまでもない。殊に「如來二種」といふ言葉が度々繰り返へされてある。即ち

他力の信をえんひとは、　佛恩報ぜんためにとて、
如來二種の廻向を　十方にひとしくひろむべし。
聖德皇のおあはれみに、　護持養育たえずして、
如來二種の廻向に、　すゝめいれしめをはします。

とあるが如き、殊に遺憾なく其精神を披瀝せられてある。聖德太子のあはれみによりて、聖德皇の哀愍攝受護持養育によりて、自ら如來二種の廻向に進み入れられたことを喜び、自ら之によりて他力の信を獲得したれば、佛恩報謝の爲に、其如來二種の廻向を十方に等しく弘め給ふのである。即ち聖人の傳道の結果は、如來二種の廻向を弘め給ふことである。よりて『敎行信證文類』は聖人の自督であつて、且つ利他の御敎化である。そこで進んで其『敎行信證』の內容に立ち入りて述ぶれば、窮りなきことであるが、其要點は、已に題目に表はさるゝ如く、念佛成佛是眞宗たる如來絕對の大悲を宣說して、苟も大悲に對して夜のあけぬ自力權假の心に住し、且つ行をなすことを戒められたのである。即ち眞假の辨別といふことは其眼目である。されど、くれ〴〵もいふべきことは、從來廢立とか敎相判釋とかいふ言葉が、餘りに理論的學問的に考へられ、從てとかく理論、分類、組織といふが如き考を以て取扱はれるが如き傾向がある。之は信仰と學問とを、別物の

如く考ふるより來る誤謬である。眞假の區別といふことは學問や文字の上ではなくて、信仰的の事柄である。從て人生々活の上に實現さるゝものである。按ずるに『敎行信證』は、如來の誓願不思議、名號不思議を信じて、罪惡の凡夫一念のもとに定聚に住し、彌勒に等しき位に入ることであつて、之を信ぜざる者は誓願不思議、名號不思議を信ぜず、自己の善本德本を賴みとすることである。而して親鸞聖人の信仰及生活が、此眞實を實現せられたものである。故に聖人の如來の本願を說き給ひしは、單に口に說き筆に示し給ひたるばかりでなく、實生活の上に味はれたのであるから、聖人の傳道といへば必ずしも流罪以後でなくて、已に吉水門下に於て此眞實を體現せられたこと、已に傳道である。從て聖人の御流罪も、此聖人の眞實に對する誤解迫害であるから、已に御流罪それ自身が傳道である。『敎行信證』の後序に

然諸寺釋門昏二敎兮不一知二眞假門戶一。洛都儒林迷レ行兮無レ辨二邪正道路一。斯以興福寺學徒奏二 達太上天皇（號後鳥羽院諱尊成）今上（號土御門院諱爲仁）聖歷承元丁卯歳仲春上旬之候一。主上臣下背レ法違レ義成レ忿結レ怨。云云

とあるのを見れば、已に法然聖人の流罪其物が、一世をして、眞假の門戶邪正の道路を明にする傳道である。況や五年の間邊鄙の群類に接して、如來の本願を說き給ふ傳道中に於ける困難の時期とてもいはねばならぬ。聖人の一代を以て如來本願の體現でありとせば、五年の御流罪は正に五刼思惟にして、東國の傳道は永刼の御修行ともいふべきである。聖人が『化卷』『眞なる者甚だ以て難く、實なる者甚だ以て稀なり。僞なる者は甚だ以て多く、虛なる者は甚だ滋し」と申されたのは、實に聖人の精神を遺憾なく告白せられたものであらう。當時佛法者の下に、心外道に走れる者あり、念佛の聲の下に賢善精進の相を現ずる者あり、一世を擧げて如來の弘實を仰ぐものがない。之れ聖人が身に口に之を用ひ行ひ、一世を化導せられたのであるから、聖人の化導を蒙りて其感化を蒙れる者は、草木の溫室に暖められて花を開くといふよりも、寧ろ山頂の氷雪が、春風に遇うて一時に解けるといふ概があつたやうに思はれる。即ち覺如上人が、東國御敎化中の一代表として擧げられた山伏辨圓の入信懺悔の如き之である。所謂『式文』に

茲祖師爲レ弘二西土之敎文一遙破二東關之斗藪一。斯遑二留常州筑波山北邊一。對二貴賤上下一。示二末世相應之要法一。初成二疑謗一之輩如二瓦礫荊棘一。遂令二改悔一之族同一稻麻竹葦一。皆翻二邪見一。悉受二正信一。共止二偏執一。還爲二弟子一。凡受レ訓之徒衆餘二常國一。結レ緣之親疎漏二諸邦一。雖二謗法闡提之輩一。聞二彼敎化一者。覺悟花鮮雖二愚癡放逸之類一。得二其諷誦一者。惑障雲霽。喩如下木石待レ緣生レ火瓦礫磨レ鈿爲レ珠。

といふが如き、春風の物を照育するが如き御敎化であつたに相違ない。併し聖人の御身の上に體現なされたる如來の光の爲に、惡逆謗法の輩が忽ち廻心して法に入りたる事は、此文を見ても分るのである。又柿崎の小畠左衞門の入信の如き、其他世に傳はる聖人の主なる弟子即ち性信坊を初めとして、其他の弟子の入信の履歷は、皆かくの如きものを有する者が多いのである。

斯くの如く、聖人の精神を大體いへば、之れより以後は之より現はれたものであるから、萬事皆聖人の御一生が頂けるのである。例せば聖人の御住居の如き、越後の配所より稲田に移り給ひてより高田の建立までは、已に十年の長年月であつた。其高田を弟子に讓りて、鎌倉地方に御滯在し給ひ、南船北馬席暖るの暇あらせられず、其近隣を御教化遊ばされたのである。

要するに聖人の御化導は、自らおほせらるゝ如く、聖人は「弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆゑは如來の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法を、われも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり」と、此一語につきてある。であるから聖人が其弟子に名號を與へ或は聖教を與ふるは『口傳鈔』の所謂

本願聖教は衆生利益の方便なれば、親鸞がむつびをすて、他の門室にいるといふともわたくしに自專すべからず。如來の教法は總じて流通物なればなり。しかるに親鸞の名字ののりたるを法師にくければ袈裟さへの風情にいとひおもふによりて、たとひかの聖教を山野にすつといふとも、そのところの有情群類のかの聖教にすくはれて、こと〳〵くその益をうべし。しからば衆生利益の本懷そのとき滿足すべし。凡夫の執するところの財寶のごとくに、とりかへすといふ義あるべからず。

とある如く、恰も大海の如何なる水をも辭せざるが如く、化益因緣の來つた時は、如何なる者も捨て給はぬのである。其代り因緣未だ來らざる者に向つては、強て自己のはからひを以てなし給ふ事がなかつた。例へは、聖人が鎌倉に於て袈裟をかけて魚肉を食ひ給ひし時の如き、一面には非常に自ら慚愧すると共に、三世諸佛解脫幢相たる袈裟の力を仰いで「親鸞はつまらぬもの、何等の價値なけれど、袈裟は佛の御力の籠りたるものなれば之を以て結緣とせん」といはれたるが如き、一點も自己の力を籍らずして、全く佛の御力を生類の上に屆かせんとの思召てある。此御精神はすべての方面に顯はれ、信謗共に因緣となりて、緣不緣の輩を皆攝取せんといふ御精神も顯はれるのである。それ故、後年關東に於て善鸞上人の法義惑亂があつた時、『御消息』に「佛天のおはからひにまかせ候ふべし」と、思ひ切りたる御安心がある一面には、他くまで如來の眞實を徹透せしめんといふ大悲と、一面には、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、みな以てそらごとたはごと、まことの事あることなしといふ御覺悟とが、遺憾なく調和せられて、御一生の上に顯はれてゐる。又鎌倉へ、聖人の念佛に就て讒訴する者ありて、上足の高弟が詰問所に出でゝ辯解したる時の如き、性信坊に下される『御消息』に、

詮じさふらふところは、御身にかぎらず念佛まうさん人々は、わが身の料はおぼしめさずとも、朝家のため國民のために念佛をまうしあはせたまひさふらはゞ、めでたくさふらふべし

とある。如何に聖人の大悲の奥深くして、併も其人生に對して和融的であるかゞ知られる。序でゝあるから尙言へは、聖

人の眞假辨立といふことにつきては、一面には一歩も權假方便を許さずして、あくまで絶對他力の眞實を顯はさんとするに一點も餘地なき、外面より見れば頗る狹隘なるが如く思へると同時に、已に權假と名け方便と名けらるゝ以上は、其物を其まゝにして是認なさずとも、それが直ちに眞實に引入し大悲に廻入する方便として是認されてある。此點からいへば、又實に窮りなく廣きものであつて、一切の善惡一として眞實の本願に廻入出來ないものはない。よりて十九、二十の本願の如き、所謂廢立決判を主として化土往生の本願であるというて、恰も自力の行者を牢獄にても縛ぐが如き考を以て見てはならぬ。寧ろ自ら疑惑の牢獄に立て籠るもの故、自然の結果として絶對他力に隔をするのてある。換言せば、自ら佛智不思議を疑惑するもの故、自ら疑城胎宮を作ることになるのである。然るに十九、二十の本願には、其佛の不思議を疑ふ者を愍み、隔つるものを隔てずして救はんとの誓願不思議、名號不思議が十九、二十の本願である。不思議を疑ふは行者の方にあるのであるが、其疑を飽くまで翻さしむる本願不思議即ち十九、二十の本願であることを忘れてはならぬ。眞假辨立が、一面には眞實としては一歩も許さぬけれども、眞實に引き入れる道としては、八萬四千の法門悉く聖道權假の方便である。之れ聖人御德の大なる所以てあつて、善惡凡夫を攝取し給ふ本願海の實現である。

斯くの如く、關東の傳道終りて再び故郷に歸り、扶風馮翊ところ〳〵に移住し給ひ、緣に從ひて教化を垂れ給ひ、最後に我屍を鴨河に投ぜよと遺言し給ひ、御年九十歳御示寂の時まで皆傳道ならぬはない。否、御入寂の後大谷の御廟を中心として、十方世界御名の傳はるところ、之れ聖人の滅後に於ける傳道である。

以上、傳道といふ名の下に、親鸞聖人に對する感謝の一端を申した次第である。

親鸞聖人の『入出二門偈』

觀彼如來本願力　凡愚遇無空過者
一心專念速滿足　眞實功德大寶海
菩薩入出五種門　自利利他行成就
不可思議兆載劫　漸次成就五種門

今日は恰も三月二十三日、庚元元年聖人八十四歳の今月今日に於て御製作あらせられたのが『入出二門偈』てあります。聖人が御一代の間私淑したまひて御名まで親鸞と名のりたまひし天親菩薩の『淨土論』と曇鸞菩薩の『註論』の御示しによりて、願力成就の一心五念の心行てあることを御教化下されたのが『二門偈』てあります。若し『愚禿鈔』を以て愚禿の領解を御述にべなりしものとすれば『二門偈』は親鸞の御頂きなされた他力廻向を御示し下されたのてあります。猶適切に申せば『淨土論』及『註論』の眞髓を聖人の御頂きなされし思召の儘に御示し下されたのであります。抑〻眞宗根本の聖典『教行信證』が如來二種の廻向といふことが淵源てあります。しかるに全體廻向といふことは普通なれば行者より佛に對し、他人に對して我が善根をさしむける意なれども、聖人は他方の眞意を開闡して如來廻向といふ大德音を垂れたまひたのてある。行者より云へば不廻向てある、一として我等は善根を持たぬ、

参らせるものがない、盡く如來より我等にさしむけ與へたまふのである、是が如來廻向である、本願力廻向である。されればこそ「若しは行、若しは信、若しは因、若しは果、若しは往、若くは還、一事として如來清淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなし」と仰せられ、又『二門偈』の下の文にも「願力成就を五念と名く、佛よりして言へば利他と言ふべし、衆生よりして言へば他利と言ふべし、當に知るべし、今將に佛力を談ぜんとす」と仰せられたのも皆此廻向の一轉換である。特に此佛より衆生に對する廻向なりと方向轉換を示されたる鍵鑰が曇鸞大師の他利利他の深義である。されればこそ『御本書』は二種廻向に初まりて『證卷』の終りが他利利他の深義に終らせられたのである。深義々々と仰せられたは、此他利利他の御釋によりて廻向の方向が如來より衆生に向ての御廻向ときまつたからである、如來廻向といふことが明らかになつたのである。其如來廻向の三願的證が本となりて、『敎行信證』の骨子となつたことは言ふを待たぬ次第である。此の如く淨土眞宗の根本たる如來廻向の根本は『淨土論』の第五の廻向門である。してみれば五念皆如來の願力成就である。『和讃』に「如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり」、是如來成就の五念である。況んや世尊我一心歸命盡十方無碍光如來は本願三信の信心たることを疑はない。「天親論主のみことをも、鸞師ときのべたまはすは、他力廣大威德の、心行いかでかさとらまし」と云ひ、「論主は廣大無碍の一心を宣布して普偏く、雜染堪忍の群萌を開化し、宗師は往還大悲の廻向を顯示して、慇懃に他利利他の深義を弘宣せり」と仰せられたのである。而して『二門偈』は全く願力成就の一心五念たることを顯露するために御示し下されたのである。而して、しかも今特に掲げたる八句は其眼目となりて、全篇を活躍せしむる他力の至極を示されたる聖人の御精神であります。

「觀彼如來本願力、凡愚遇無空過者、一心專念速滿足、眞實功德大寶海、」の四句は申す迄もなく『淨土論』の觀佛本願力等の五言四句を七言四句に延べさせられたのであります。「普通『淨土論』の四句が聖人の御像の讃になりてありますが、又『二門偈』の四句を讃文にしてあるのもあります。」『銘文』に聖人の御釋もあることなれば、何卒御直々の御敎化をいたゞきて賞ひたい。曰く「觀佛本願力、遇無空過者といふは、如來の本願力をみそなはすに願力を信するひとはむなしくこゝにとゞまらずとなり、又曰く觀は願力をこゝろにうかべみるとまうす、またしるといふこゝろなり、遇はまふあうといふ、まふあうといふは本願力を信するなり」と、觀は觀知することじや、信知することじや、信することじや。しかる初めに一旦みそなはすと訓ぜられた。みそなはすといとは、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはすと同じく、如來の我等をみそなはすことじや。この如來のみそなはす願力の御力が我等に屆いて下された一念が信じたのじや、遇ふたのじや。現に我等現に六百五十回忌に遇ふことを得たるは全く如來聖人我等を憐れみ、みそなはす御惠じや。此御惠に遇ひながら信ぜざれば遇はざるが如し。されば稻田の庵室に聖人の出て遇ひたまひし辨圓の如く、我等此度聖人の御遠忌に遇ひぬれば空しく過ぎ

ることは出來ぬのである。特に凡愚と仰せられたは猶更有難い。凡愚のための御本願じや、御開山じや。一心專念速滿足、眞實功德大寶海、天親菩薩の一心と結びつけて、善導大師の一心專念を御示し下された。又我依修多羅、眞實功德相の御文と結びつけて、七言にして示し下された。銘文に「本願力を信樂するひとは、すみやかにとく功德の大寶海を信者ののぞみに滿足せしむるなり、如來の功德のきはなくひろくおほきなることを、大海のみつのみてるがごとしとたとへたてまつれるなり」と仰せられた。猶本願一乘圓融眞實功德大寶海の御釋をひらきて、うら〳〵と聖人直々の御敎化をいたゞきて貰ひたい。實に春の海に萬德の水たゞよいて、圓融無碍の嘉號、あらゆる衆惡の萬川を轉じ、煩惱の衆流を歸して、眞如一實の大寶海を滿足せしめたまふのである。

菩薩入出五種門、自利利他行成就、不可思議兆載劫　漸次成就五種門、の四句は即ち上に詳記せる願力成就の五念門を御示し下されたのである。上にも段々述へたる如く如何にも他力廻向願力成就の御思召は有難いが、『淨土論』にある菩薩はとても法藏菩薩とは見えぬ。しかるに今は法藏菩薩の不可思議兆載永劫の自利々他の御修行として御示し下された。一寸考へると實に奇想天外より落つるが如く思へるが、左樣ではない。抑『淨土論』にある往生人の菩薩が淨土に往生して見れば、得至蓮華藏世界而證眞如法性身の境に入りて、此に一如法界より姿をあらはし、應化身を現して蘭林戯地門の還相廻向の菩薩となるのである。されば『證卷』には『註論』を引きて、菩薩は皆還相廻向の菩薩と仰せられてある。しかるに今之を法藏菩薩となされたは決して奇想でない。其源に泝りて其根本を示されたのである。此往生人の菩薩の眞如に入るも、一如法界を出づるも自力ではない。此入出の二門は本法藏菩薩が入出二門したまひし御成就の結果の御廻向である。即ち一如法界の都より法藏菩薩と名乘りて出てさせられたのである。是れ還相廻向の菩薩が如來より來生する其根本が一如よりあらはれたまひた法藏菩薩是である。されば『銘文』の眞實功德大寶海の御釋の終りに曰く「この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となのりたまひて無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀如來となりたまふがゆへに報身如來とまうすなり、これを盡十方無碍光佛となつけたてまつれるなり、この如來を南無不可思議光如來ともまうすなり、この如來を方便法身とまうすなり、方便とまうすは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまうすなり、すなはち阿彌陀佛なり、この如來は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光佛とまうすなり、この如來十方微塵世界にみちみちたまへるがゆへに無邊光佛とまうす、しかれば天親菩薩は盡十方無碍光如來となつけたてまつりたまへり。」此御文によりて見れは、眞實功德大寶海の一實眞如海より姿を顯はし御名を示して法藏菩薩とあらはれたまふことを示されたるものにして、其廻向の結果が往生人の上にあらはれて、亦眞如法性身を證して姿を顯はして、還相廻向の菩薩となるのである。されば聚かに其本を求むれば、一々法藏菩薩の御苦勞たらざるものはない。此御苦勞の結果として南無

阿彌陀佛としてあらはれ、盡十方無得光如來としてあらはれて下されたのである。其御姿を『銘文』にもしみ〳〵と御示し下されたのである。下の讃門の下にも「如來の光明智相に依て、實の如く修行し相應せんと欲するがゆへに、則是無碍光如來の攝取選擇本願なるか故なり」と眞如一實功德寶海の大行を示されてある。かく頂き來れば、「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」との御教化ならざるものはない。

己下五念門一々皆法藏菩薩の身口意の御苦勞として御示し下されてある。是所謂「如來不可思議兆載永劫に菩薩の行を修したまひし時、三業の修したまふところ、一念一刹那も淸淨ならすといふことなし、眞實ならずと云ふことなし」と仰せられた所以であります。『大經』に法藏菩薩御修行の有樣、皆是如來の五念であります。此五念が御廻向の結果として信後相續の上に一々あらはれ來るのであります。夫故自然の德であります。一として思惟思案を要せず、唯如來の御廻向を受けるばかりであります。若し行者が思惟思案をするなれば五劫思惟の御苦勞をむだにするのであります。唯御受けをするより外はありません。されば、こそ聖人は『化卷』に「敎我思惟は方便なり、敎我正受は金剛の眞心也」と仰せられたのであります。

唯御受け一つが肝要であります。そくばくの業をもちける身にてありけるとあるが、受け心地であります。「たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」、「いづれの行もおよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし」と、我身の罪惡が分つたればこそ、即五劫思惟永劫の修行が私一人のためと分かたのである。我等若し罪惡深からずんば、五劫思惟も要せぬのである、永劫の御苦勞もない。である。一切の群生海無始より已來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして、淸淨の心なく眞實の心なし、是を以て如來不可思議永劫の御苦勞をして下されたのである。聖人は九十年の御苦勞をして下されたのである。

南無阿彌陀佛。

（明治四十四年三月二十三日晨時稿了）

本誌本號は聊か聖人の六百五十回忌報恩之微衷にて輯錄致したるものに有之毎月延刊の段は誠に申譯無く御詫申上候匆々

求道發行所

近角常觀著作

訂正增補 信仰之餘瀝

第拾壹版 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黑暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら內心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絕ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

人生と信仰

第參版 定價卅一錢 郵稅四錢 袖珍美本

◎第一章 人生問題と信仰 ◎第二章 悲觀思想と信仰 ◎第三章 倫理力行と信仰 ◎第四章 犯罪心理と信仰 ◎第五章 社會問題と信仰 ◎第六章 國家秩序と信仰 ◎第七章 世界宇宙と信仰

本書內容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的敎訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

親鸞聖人の信仰

第貳版 定價七拾錢 小包料八錢 クロース綴

親鸞聖人の『敎行信證』は、聖人が一代の信仰經驗を結晶して、他力信仰の本源を闡明し給ひたる眞宗根本の寶典也。而して本書は著者が入信以來起居常に此の寶典を以て自己が信仰の指針となし、日夕拜繙熟讀の餘、茲に初めて其の實驗信味の餘瀝を編述したるものとなす。幸に有緣同朋の士、一讀を賜はん事を。

發行所 東京市振替口座東京一六六九六番 求道發行所
東京市本郷區森川町一番地

御遠忌第五記念出版特價提供

浩々洞同人著

親鸞聖人御傳鈔講話

精神界の革命者親鸞聖人の滅後三十餘年、本願寺第三世覺如上人が、自ら聖人の舊蹟を巡禮し、泣く〳〵筆をとりたまひしものは「御傳鈔」なり。爾來、歲月なかれて六百有餘年、天下數萬億の同胞が、涙ながらに拜讀して、恩に感じ德を慕ひしものは「御傳鈔」なり。

茲に聖人六百五十回の聖忌に當り、浩々洞同人諸君相はかりて「本鈔」を繙き、心讀翫味、以て聖人の御傳記をたゝへ、各自の信味を披瀝せんとして本書をなす。本書は「御傳鈔」十五段の講話なり、聖人の御傳記なり。宗敎觀なり。而してまた著者同人の懺悔錄なり、感恩記なり、信仰告白なり。明治の世に新しく生き給へる親鸞聖人を識らんとする人は、この精神的大伽藍に入りて聖人の溫容に接せよ。

本書は各段毎に字解と大旨をかゝげ、次に至趣を講ぜしもの、なほ『四幅御繪傳』縮寫彩色摺八葉、及びその詳細なる繪ときを附す。

菊版 全四百頁 定價金一圓七十錢 郵稅十二錢
四幅御繪傳八葉入 採色摺 郵稅壹錢

二千部限り特價金壹圓四十錢 郵稅十二錢

製本出來 三月二十日

東京巢鴨町二丁目 無我山房

振替東京三一二二

佛敎史學會編纂

佛敎史學

毎月一回一日發行
◎初號四月八日發行

◎一部金拾錢郵稅壹錢
◎半年壹圓貳拾錢
◎壹ヶ年貳圓四十錢

初號要目

▲寫眞凝然大德自筆華嚴瑞鑑記卷一
▲同　同　自筆書狀
▲同　支那古版梵文華阿含經（高昌發掘）
▲安土宗論の眞相……辻文學博士
▲本佛師系統略考……平子鐵嶺
▲印度佛敎の北方流傳……堀文學士
▲朝鮮佛敎關係書解題……今西文學士
▲佛敎史研究の必要……井上哲博士
▲佛敎史學より見たる日本天台……鷲尾順敬
▲德川時代の佛敎各宗勢力分布……長田偶得
▲凝然大德自筆瑞鑑記の捜索……南條博士
▲歷史事實の表裏……富田敦純
▲佛敎考古小錄……鷲尾順敬
▲佛敎史學の發行幷に其主意……記者

會員募集

入會者は金壹圓貳拾錢郵稅壹錢添へ發行所へ申込べし
以上半年の料金を添へ發行所へ申込べし

佛敎史學會

發行所　東京市貯金振替口座東京一六六九六番　本郷區森川町一番地　森江書店

施本用小册子

信仰之餘瀝要略

第二版

定價五錢　郵稅二錢　部數に應じ充分割引す（但シ四册迄ハ郵稅二錢也）

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗敎的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠頭 唯信鈔文意

新版

定價七錢　郵稅三册迄貳錢（部數に應じ充分割引す）

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一册にまとめて刊行す。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て類異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一番地一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十五日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一册に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十四年四月十二日印刷
明治四十四年四月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎念佛成佛是眞宗　信觀

◎惡平等と刑名主義　講話　近角常觀

告白

◎五六日中に死ぬる　金津香藏

◎地獄は一定すみかぞかし　坂倉はま子

雜錄

◎昨年中の信仰談話會

求道第八卷第二號　明治四十四年四月廿　日第三種郵便物認可　明治四十四年四月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京市神田區淡路町二ノ一三九番地